

ガッカリしてください！

((+_+))

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自称只の一般人、仮に不良だとしても無害な不良だとのたまうとある中学生不良の日常。

目次

僕あつまらない人間です	1
よし、落ち着け、じゃない落ち着いてください！	12
この男、大バカである	18
転入生は話題になる	27
思い出という名の黒歴史	33
白兔はひた走る	46
そろそろ限界なんですけど!?	53
そうして今はこの有様です	65
お年頃なのです	78
二人の関係は……	89
何してるんです？	99

僕あつまらない人間です

僕の名前は稲津いなつ 慎まこと。ただの中学2年生です。

さて、僕みたいなつまらない奴のことを語る前に、重要な人物について少しだけ語ることとしましょう。

——因幡いなば月夜つきよ。

真つ白なツインテールに赤い瞳、ウサギを思い出させる風貌の少女。

盲目だという彼女の側にはいつも、エヴァン・Mマリア・ローゼという従者が付いている。

巫女服のような衣類を着こなす少女と、メイド服の女性見かけはそれはもう目立った。

まあ、メイドさんは初日以外は遠目で見守っているだけだったが。それでも目立っていた。

なぜ？理由は単純。それは彼女、因幡月夜は——ある日、帯刀して来たからだ。

模造刀であるそれを盲目の少女が何に使うのかって？本人に直接聞いて、そして驚くといい。気が良ければ、抜刀術を披露してくれるだろう。それはもう見事に斬れるから。っていうかなんで斬れるの？模造刀だよねそれ？ってなるから。

なんでそんなこと知ってるかって？直に見たからだよ畜生。

「それ、刀だよね？」

「はい、そうですよ」

中庭に座り込む彼女が持つ、杖の隣に置かれた模造刀を指さした。彼女は見えていないが、当たり前前のようにうなずいた。

「……使えるって聞いたんだけど、ホント？」

「ええ、もちろんです」

「マジで!?何かして見せてよ!」

年下の少女にそんな会話をして、拍手までしたからね過去の僕。

もし戻れるなら止めたいね、関わんの止めとけって。

普通の少年らしく刀に魅了されたのは分かるけど、止めとけって。

3つ程年下で、数カ月後には自分が中学生になってどうせ話す機会なくすだろうからとか、そんな「折角だから」みたいな感覚で妙な思い出作りしようとするなよって。

なぜ？なぜって決まってる。

中学二年になってから、その縁とやらが有難迷惑として返ってくるから、だ。

「——こんなところで、何をやっているんですか。マコくん？」

「うげっ……こんな所登って来ちゃダメでしょ？」

「心配そうな声出してもだめですよ、ちゃんとうげって聴こえていますからね？」

彼女は聴力が非常に良い。良過ぎて学園中の音を聞きとれるくらいだ。

ちなみに聞こえるだけではなく、聞き分けられるというのだから、彼女の能力の高さが伺える。

つまるところ、彼女に対し隠れるというのは非常に難しい。僕は忍者ではない。そう思って彼女が来れそうにない場所で大人しくしていたのだ。

いくら能力が高いと言っても、態々立てた鉄骨の木の上まで追ってこられるのは、流石に予想外だった。

「あーお叱りは勘弁してよ。ほら高そうな巫女服汚れちゃうって、降りよっ。」

「そうですね……では」

んつと彼女が両腕をこちらに伸ばしてきた。

少しその仕草を見て、思わず額に手を当ててしまう。

「……えっと、抱えろと？」

「はい。楽に降りられますし、罰にもなりますから」

いいでしょう？と小首までかしげてくる幼女。

何だこの可愛い生物は。いや、騙されてはいけない。彼女はこの学園で高校生にすら負けない天下五剣と呼ばれるほどの達人だ。

盲目で抜刀の達人で幼女とか何それ最強じゃね？というか何この子。素でこれって魔性の子だよ、魔者ちゃんだよね？

「どうしたんですか？」

「あー、いや。うん、何でもないデス」

失礼して彼女を横抱きに抱える。

両腕が首に回され密着感が増して思わずドキツとするが、落ち着け相手は幼女だっ!!

「ほいほいっ」と

「……ふふっ」

トットトット、鉄骨や棒の出っ張りを足場にして降りていく。

耳元で小さく笑ったのが聞こえた。

ちなみにこの子の口癖は「ガツカリです」らしいが、数えるくらいにしか言われたことがない。

まあ言われる程長い付き合いというわけでもないからかもしれない。

僕は彼女に初めて出会ってから、ちよくちよく一緒に遊んでいた。でもそれも小学校を卒業するまでだ。卒業したら中学生になり、4つ下の彼女とは同じ学校で過ごすことはない……そう思っていたから。

そして中学一年になり、友人も出来た僕は、まあちよつと問題を起こしてしまった。その結果ここ、私立愛地共生学園へと転校させられてしまったのだ。

この学園は女子生徒が武装許可されており、そのほか色々あって「問題児更生施設」のような側面を持っている。まあ、つまり悔い改めろと言われたわけだ。

言っておくが、僕は転校に関して反省も後悔もしていない。胸糞悪い奴らを真正面から文字通り潰した結果だ。受け入れている。

問題は……なぜかそんな不良の終着点のような場所に、4つ下の因幡月夜が中等部生徒として在学していたことである。

懲罰とか色々あるんだろうなーと思っていたところに、なぜか（心なし）目を輝かせた幼女到来。しかも、その彼女が自分のお目付け役だという。

意味が分からなかった。というかわけ分からん。

だがまあ、あの抜刀術と真正面からやり合うとかなりキツそうだし、何より自分勝手な理由で年下の女の子相手に暴力を振るうつもりは起きなかった。

だからまあ、監視くらいいいかなーなんて思っていたら……。

——これから私と衣食住共にすることになりますから、よろしくお願ひしますね。

そんなことを、疑問符がついていない、決定事項を、笑顔で言い放ちやがったのだ。

僕あそりや逃げましたよ。ええ、流石にロリコン認定待ったなしじゃないですか。レットел貼られるのは慣れてますけど、そんなレットелはご免ですとも！

本人に言ったら「ブッコロ」案件なので、無言で窓から逃げ去ろうとした僕を誰も責めないでくださいお願いします。

驚いたのは、従者のエヴァンさん使つてまで追ってくるんですからもう大変。

天下五剣とか呼ばれてる人たちも混ぜつてお祭り騒ぎ……いや、あの、丸腰の中学生に模造とは言え剣をもった高校生が斬りかかるとか、もうこれダメだよな？アカンやつのはずだよな？なあって誰も罰を受けなかったのか、それが納得いかない……僕はその日は飯抜きにされたというのに……！

「ほら、速く走ってください。遅刻しちやいますよ」

「え、ちよつとまって抱きかかえたまま行けど？」

「はい、もちろんです。貴方のことを説明しないとイケないじゃないですか。また逃げられたら面倒ですし、罰ですよば・つ」

「うぐぐ……」

「頑張ってください。今日は私、頑張つてお弁当作ってみました。無事一緒に食べるためにも、走ってくださいね？」

「はい、頑張りますッ」

この天才幼女、もちろん作る飯はとても美味しい。

盲目というハンデがあるのに、嗅覚と聴覚、味覚、触覚を常人以上にフル活用して作るその様子にも非常に庇護欲が湧く。

……いや、だから、そうじゃなくて——僕はロリコンではないから!!頼むから、皆お願いだからそんな目で見ないでくださいお願いします!!

僕ボカあ喧嘩くらいしか能がない、只の健全な不良もどきなんです!!つまらない人間なんです!!

(そう、僕は一般人。従者付きのご令嬢様とは月とスッポン)

だから、そう。いつかこの子が本当に「ガツカリ」してくるだろうその日まで、僕はこの関係に甘えてしまうのだろう。

でも仕方ない。僕は腕つぶしだけの弱い人間なんだから。

(早めにガツカリしてくださいね、お姫様?)

私、因幡月夜は少し変わっているらしい。

私にとってエヴァは大事な友人だし、この刀も私の努力の結晶だ。でも、私と同じ年の子供たちはそうじゃない。従者なんていないし、刀を振るわない。

そもそも、武道を嗜んでいる人が少なかった。

(むう……困りました)

昼休みに作戦時間として、人の少ない裏庭へと赴いた。

エヴァの付き添いのあった初日で、学校の地理は既に把握していたため、このくらいの移動はたやすい。

さて、問題点を軽く上げてみましょう。まず、私には抜刀術と聴力重視の空間把握能力くらいしか詳しく話すことはありません。

漫画の話をされてもわかりませんし、テレビの話をされてもやっぱりよく分かりません。派手な音と会話でストーリーは大体わかるのですけど、可愛いとかカッコいいとか、やっぱりわかりません。

衣服だって自分ではどうなのかもよく分かりません。ただ、この衣服は抜刀術にあっついていて、エヴァ曰く可愛いから着ているだけです。

よって、私に皆さんと話し合える事が、ありませんでした。

だからちよつと無理を言っアイデンティティて模造刀を持つてきたのですが……大

失敗。

注目が集まっても、危ない子と囁かれ始めてしまった。

(友達ひやくにん、できるかなー……無理です)

どこかで聞いた歌を思い出し、ガツクリと項垂れてしまう。

このまま避けられ、一人ぼっちで小学校を卒業してしまうのでしょうか……飛び級してあの人の学園に編入予定とはいえ、何の思い出もないというのは、悲しくなります。

いけません、心なし涙が零れそうになってしまいます。おかしいです、鍛錬でもこんな感情を覚えたことはないのに……。

そんな風に乱れた感情で涙をこらえることに必死になっていた私は、近づいてくる足音に気づきませんでした。

「ねえ、きみ」

「!? は、はい、私……ですか？」

「うん。えっと、因幡さんだっけ」

「はい、そうです。貴方は？」

覚えのない声色、鼓動、吐息、骨の動き。

少なくとも同じクラスではない人だと瞬時に理解した。

「僕は稲津慎。6年なんだけど、きみの噂が気になって……」

「私の、噂？」

一体何なのだろうか。よく分からない子とか、刀を持ちこんだ危ない子とか、そんなことなら聞いたことがある私は、禄でもないことだろうと思っていた。

だから……彼の興奮した声色に、戸惑った。

「それ、刀だよね」

「はい、そうですよ」

何を当たり前のことを言っているのだろうと、さらに困惑した。

「使えるの？」

「ええ、もちろんです」

使えなければ杖でもついている。一体なんなのだろうか、からかっているのかもしれない、そう不安感を覚えた。

そしてそれらは、次の一言で吹き飛んでしまった。

「マジで!?!何かして見せてよ!」

「……え?」

とても楽しみにしている、という声色。

何がみられるのだろうか、と興奮している呼吸。

ワクワクして、握り拳を作ってしまったているのだろうか骨の音。

——この人は、私に興味を持ってくれているのだ。

従者のように付き従うのではなく、見えないことで補っていた、ほかの人からすると特殊な能力に尊敬するわけでもなく。刀に恐怖しているわけでもない。

この人は、私が刀でなにかが出来るのだと、私に興味を持っている。

(……?)

胸の辺りによく分からない鼓動を感じた。おかしい、息は整えていたのに何なのだろうか。

もしかして、いや、もしかしなくとも、緊張している…?私か?

驚きと疑問と困惑を感じつつも、気づけば彼の要望に頷いていた。

「……いいですよ」

「やったー!!」

拳を振り上げガッツポーズというものをしたらしい彼。

喜んでもらえていることを思つて——また鼓動がはねた。

もう、なんなのだ。もう一度整えなおし、少し離れるように言った後構える。

「……」

「……」

彼も私の集中を察して無言になり、辺りが静かになった。

そして、一陣の風が吹き、木の葉が舞った——瞬間、私は抜刀した。

三枚の葉が、彼の前で真つ二つに斬られ、そのまま落ちた。

「……す、スツゲエー!!」

「!?!」

大きな声にビククリしてしまった。

なるべく分かりやすいように、出来るだけゆっくりやったのだが、それでも普通の人には視認するのは難しいはず。

しかしこの驚きよう……もしかして見えていたのだろうか？

「何今の動き？ 因幡さん凄いな！」

「えっと……ありがとうございます、稲津さん」

「はー。いや、でもホント凄いな。見えないのに刀そんなに振れるもんなんだね……っていうか、まず抜いて戻るのがすごいよね」

その後も彼は凄いな、かつこかわいい、最強だー！、とひたすら私のことを褒めまくってくれた。

途中から自分でも顔を真っ赤にしていた自覚があった。褒められることはあつたけども、こんな熱烈に、直接感情をぶつけられたのは初めての経験だった。

「見えたのでしたら、稲津さんにも出来るかもしれないよ」

「え、マジで？」

「はい。相応の鍛錬が必要ですけど……才能はあると思います」

かなり手を抜いたとはいえ、雲耀の一端を初見で見切れたのなら、十二分の才能を持っている。

今からでも鍛え上げれば、彼はもしかしたらもしかするかもしれない。

「んー……いや、僕はいいよ」

「そう、ですか」

しかし、彼は断った。

胸元にチクツと何か刺さったような痛み。これは分かる、初めて会った人に拒否されたからだろう。

人と触れ合うというのは、嬉しいだけではない。これは家柄として、分かっていることだった。

「いや、その鞘っていうんだっけ？ それに刀を抜き差しするのも大変そうだし。こまごましたの向いてないんだよねー」

「むう、練習すれば出来ることですよ？」

「んー……まあ、機会があればね」

機会と聞いて、次のことを想像してしまった。

彼は六年生……数カ月後には中学生になってしまう。私の飛び級先は元女子高で、男子生徒の風当たりが強いと聞く。彼はそこにはい

かないだろう。

そう思うと、自然に口が開いていた。

「でしたら、……」

「ん？」

「抜刀術、もつと速くできるんです。もつと、すごいことも、出来るんです……」

何を口走っているのか、少し自分で混乱した。

勝手に口が動いたということは、これは私の本心、本能的な何かだろう。ただ、その何かをどう伝えればいいのか分からなくなっていた。

「マジでか。まだ速いとか、何それ凄い」

「ええ、見えないくらい速くできますよ」

「じゃあまた今度見せてよ。そろそろチャイムなつちやうしき」

「は、はい！」

「次余裕あるとき来てよ。僕六年四組だからさって、四組が分かるんいか」

「いえ、大丈夫です。分かります」

「そうなんだ？わかった。じゃあ、またね！」

またね——そう、そうだ。

「はい、また」

私はまたねと、次の約束をしたかったのだと、そんな簡単なことに初めて気づいた。

次の日から私は家と従者、学校に無理を頼み続け、模造刀を持ち歩くようになった。

彼に楽しんでもらいたい、喜んで欲しいという一心で……。

それが私の初めての人である彼との出会いで、きつかけだった。

彼が見てくれるのがうれしくて、彼を感じるのが楽しくて、彼と一緒にいるのが心地いい。

時折鈍感でデリカシーにかける事もあるが、ガツカリなのは些細な

ことばかりで私は彼との日々で満たされていた。

だから中学生となつて別の学校へと行ってしまったときは悲しかった。

そしてそれ以上に、不謹慎だとはわかっているのだけど、彼がこの学園に転入してきたことが、何よりも嬉しかったのだ。

ほかの人が何かをする前に自分が矯正役に立候補し、一緒に居られるようになった。他の誰よりも真つ先に近くへ行つた。……唐突過ぎて、逃げられたのは少しショックだったけど、それでも今こうして彼は私の近くにいます。

(私の、友達……私の、私の——)

友達だとはつきり言える人。でも、それ以上に何かを感じる人。

まだそれに名札を貼れない未熟な自分だけど、ずっと一緒に居たいと思える人。

ガツカリなんてする余裕が持てない人。

(だから、頑張らないと)

私には抜刀術くらいしか自慢できるものがない。

もつともつと、色んなことをして彼との話題を広げ、彼と一緒にの時間を作っていく。

彼にガツカリしてほしくないから、慣れないことだって頑張るし頑張れる。

その手始めが料理。ほかにもエヴァから沢山教わっていく。

「もうこんな日が来るなんて……」とエヴァが何か訳の分からないことを言っていたけど、嬉しそうだったからきつと間違いない。

(頑張ります。私、頑張りますから)

ギュツと彼に抱き着き、胸元に顔を押し当てる。

ドキドキとした鼓動は、彼のか私のか——暖かくて気持ちがいいから、きつと彼のだろう。

暖かくなつた私は、決めつけてもつと力を込める。

病弱で非力なのだから、これくらいしないとダメですよ……？

(ずっと、一緒にいてくださいね……？)

恥ずかしくて言えないその気持ちと言葉を胸に仕舞い込み、私と彼

の今日が過ぎていく。

——今日も、私は彼にガツカリする余裕がないでしょうね。

よし、落ち着け、じやない落ち着いてください！

学園に衝撃的な事件が起こった。

天下五剣と呼ばれる人たち。そのうち、二人に喧嘩を売って見事勝利した人がいるらしい。高校生で、女帝と呼ばれるようになっていった。

ちなみに因幡月夜は個人的都合によりその場から離脱していた。ええ、どこぞの寝坊助を起こしに来ましたとも。ごめんなさい。

「……」

「……………えっと」

で、今の問題はその女帝、天羽あもう斬々きるきるさんが目の前にいるのだ。キリつとした顔立ちに黒い長髪、高校生として真つ当に発達している身体つき。奇麗系の美少女という感じだ。

これで瞳が死んで……もとい、ハイライトが消えていなくて、微笑みの一つでも溢せば男女関係なく墮ちる人は多いのではないだろうか。

「ふむ……キミは、不思議だな」

「へ？」

「この学園では男子はけつたいな格好をしているだろう？」

「あ、ああ、アレですネ」

思わずしかめっ面をしてしまう。

この学園、女子による圧制が強い上に、男子は殆どが問題児。

故に、まず問題児の牙が折られる。そしてその勢いで色々粉々にされ、無理な女装をして屈服を示すのだ。

慎は初日に五剣と追いかけてつこを繰り返して、最終的に月夜に捕まりはしたが屈服はしていない。

理由としては逃げと防御に徹していたことと、とある熊相手に気に入られたからというのが大きい。

五剣を相手どれる実力を畏怖され、熊に気に入られたことが色々プラスに作用しているからだ。

「キミはしないのかい？」

「いや、流石にあれはちよつと……じゃなくかなりいや、です」

「まあ確かに気色は悪いが……私はてつきりアレが男子の正装なのだと思っていたから気になつてな」

「そうなんだ、ですか」

相手が先輩ということ、慣れない敬語を使う。

月夜が基本丁寧語なのだが、意識して使うのがこんな面倒だとは思っていない。改めて尊敬してしまう。

「ただ、大多数がああ格好というのには意味があるんだろう？。そして君はそれを免れている。理由は……天下五剣に認められているから、かい？」

「アツハツハ、そんなまさか。あの人たちには模造刀やら刃挽きしてある刀やら向けられる程度の仲ですよ。ハハハ……ハア」

つい過去のお祭り騒ぎを思い出して深くため息をついてしまう。

もうあの鬼ごっこはしたくない、絶対に。そう思えるくらい大変だった。

「ほう——」

「えつと……」

キラーンとハイライトの消えた瞳が煌めいた気がした。

月夜といいこの先輩といい、なんで色めいてない瞳が輝くんだろうか、訳が分からない。

というか、勘が告げている。この人はヤバイ、これ以上会話するべきではない。

「つてことで、サラバ!!」

——アツハツハ、これで僕は自由だああああ!!!

妙なテンションで飛び降りたが、此処は屋上である。

途中で出っ張りをつかみ、窓を割るつもりで3階に蹴り入った。

偶然窓が開いていた上に、人がいなかったため問題なく逃げ切れる。

今日学んだことは一つだ。

高等部の屋上でサボったり、しちゃいけない。

あそこは変人奇人の度合いが中学生より強い。そう確信した。

不思議でどこか懐かしいような気配だった。

それが天羽斬々の感想だった。

唐突で奔放でやることなすこと想定外。自由な男子。

(あの制服、中等部か)

屋上から飛び降り、無理やり下の階に逃げ延びられる身体能力とその度胸。

ますます似ていると思いつつながら、追うかどうかを考える。

「……いや、別にいいか」

追ったところで何を言うでもない。重心や目線の配りからして我流の喧嘩殺法だろう事は分かった。向かってきても対処可能だろう。

そして五剣の様に何かしらの地位にいるわけでもない。

なにより、懐かしい気分になんてもらえなかった。

「気分がいいうちに、ひと眠りするのでしょうか……ふふ」

授業をサボるのもいつぶりだろう、なんて思いながら彼女は瞼を閉じた。

「で、言い訳は以上ですか?」

「いや、言い訳っていうか、仕方なくない?」

トイレに行くといつて教室を出たまま、結局授業にでなかった理由を月夜に話す。

だがダメだ、言っておいてなんだが僕が悪いつ。自覚がある分これは言い逃れなんて無理だこれ。

「サボろうと思つて高等部の校舎に無断侵入……そして飛び降りの危険行為」

「あ、あのお……」

「……フフ」

「あ、アハハ」

「——ブッコロ案件ですね。ちよつと逝ってきます?」

怒気で目を開いた月夜を見て、僕は無謀な脱兎を試みた。何時も瞼を閉じている彼女は、気分によって目を開くことがある。今回はダメです。はい、おこです。

ちなみにこう見えて僕はかなり脚が速い。なんせ五剣と熊相手に逃げ切った男だ。

だが、まあしかし……正座をしていた上に近距離、その上容赦ない月夜相手に逃げられる可能性は、皆無である。

「この距離で逃げられるつもりですか？」

そんなつもりは毛頭ない。脱兎するには下準備が必要だ。

そんな考えを読み取っているからこそ、彼女は「ガツカリです」と言わないのだろう。

僕の動きを注視しながら、模造刀に手をかけた。

彼女に目くらましは通用しない。だが、彼女の邪魔になるものがその分存在している。そしてそれは、彼女の抜刀術に負けない——その名も！

防・犯・ブザー！！

けたたましい音が鳴り響いたが、これだけでは彼女は止まらない。

聞き分けられる上、何よりすでに間合いは測られた後。故に、彼女の圏内から逃げるにはもう一工夫必要である。

(まあ、ただ近くの机を転がすだけなだけどネー！)

出来ることなら彼女の近くに障害物を用意する。それだけで、大分時間稼ぎが出来る。

「むっ」

だが流石というべきか、彼女は自分との間に障害物があることを察した。

判断した彼女は抜刀せず、納刀したまま床に突き立て、宙に体を浮かせ……くるりと宙で回転、ついでにカキンツと抜刀音がしつかりして、ブザーが壊され止まった。

止まったついでに彼女はそのまま慎の背後に着地。

机を使った作戦が、見事自分を捕らえる邪魔ものになってしまった。

「つて僕の馬鹿あ——！」

「……ブザーに障害物、ずいぶん考えてたんですね……」

「あ、いや、その……」

冷気が漂っているのかと勘違いする程に怒気が伝わってきた。

離れて見守っていたクラスメイト諸君が、身を寄り添ってこちらを見ている。関係なくとも怖いらしい。

「僕が悪かった、だから落ち着け。いや、落ち着いてください……！」

「……………」

スツと息を吸い込んだ。抜刀は免れたが叩かれる、そう思って身構えると……思ってもいない台詞が飛び込んできた。

「——そんな本気で、逃げなくても、いいじゃないですか」

寂しげな悲し気な、切なげな……とても聞いてて申し訳なくなる声色だった。

顔も下を向き、表情が見えない。ついでに言うのなら怒気がきれいさっぱり消えている。

そして何より、クラスメイトの視線がすご痛い。ちよつとまって、さつきまでかわいそうな目で見てたよね？ 同情心が完全に月夜に移っちゃってますよこれ!?

「えっと、あの、つ、い、因幡、さん？」

「……………」

弁解しようと思ったが、今度は頬を膨らませた。

「……ずっと、言おうと思ってましたが。なんで、前みたいに呼んでくれないんですか」

「え、あ、いや……前は小学生で無邪気だったというか」

「ほんの2年前ですよね」

「だ、男子三日あわ——」

「……………」

「……ごめんなさい恥ずかしかただけです申し訳ありませんから涙目になるのはやめてくださいホント勘弁して」

こういう風に感情に動かされる彼女を見ると、抜刀術の達人で家柄がお嬢様で難しい家庭環境だというのに……年齢通りの子供なのだと、自覚してしまう。

そしてなお一層庇護欲と申し訳なさが強まってしまっているので、必死になだめた。

結局、「月夜ちゃん」でもなんだか不満そうだった彼女は、普通に「月夜」と呼び捨てることで何とか機嫌を戻してくれた。

ちゃん付けだとNGで、呼び捨てはOKって、よく分からないんですけど……。

「そういう所はガツカリです」

「うっ」

「けど、いいです。その辺は、貴方らしさでもあるので、いいです」

「それ、諦められてない？」

「ふふ、そんなことないですよ？むしろ逆ですね」

「??」

そんなことがあつた直後、次の授業を開始した先生（未婚）からひたすら問題を当てられ分かりませんといいながら月夜に教えられる無限ループに入ることになった。

どうやら僕には何かしらの地雷を踏む才能があるらしい。

凄く、すごおおーく、嬉しくない!!

この男、大バカである

中学に上がったばかりの頃、慎は一人の友人を得た。

その友人は別に我が強かったわけではなく、特に何かしらの特異があつたわけでもない。

どこにでもいる、ありふれた男子生徒だった。

一つだけ特徴を挙げるのならば、名前が尊ミコトという、少し女っぽいイントネーションだったことくらいだろう。

「お隣さんだね、よろしく！」

「う、うん……よろしく」

尊は大人しく従順で、何より気が弱かった。

対する慎は活発でおふざけが好きで、そしてマイペースを貫く気の強い人柄をしていた。

真逆な二人だが、凸凹デコボコが合わさるように気が合ったのだ。

基本尊を引っ張っていくように色々連れだしては遊びまわる慎。短い期間で親友と呼べる間柄になるのに、そう時間はかからなかった。

そして、そんな楽しい時間は圧倒間に過ぎていき——事件は起こった。

尊がいつもの時間に登校せず、一日学校を休んだのだ。

携帯は繋がらず、先生に問いかけるも明確な答えは返してくれなかった。

気を焦った慎は街中を駆け回るも尊を見つけることがかなわず……数日が過ぎた。

「みこと!!」

「あ……久しぶり、まこと」

「……………」

数日後、ようやく再会した尊は……手足を折られ、身体中を包帯だらけにしていた。

顔だつてミイラ状態で、こちらを見て笑みを溢してくれる事すら痛々しい。

「おま、何があつたんだよ……」

「えへへ、ちよつと、絡まれちゃつて」

いつも通り学校へ通おうとした尊は、所謂不良に出くわしてしまつたという。

目元まで髪を伸ばした尊は、見るからに気弱で恰好の的だったんだろう。避けていこうとしたのに、無理やり相手から当たつてきて絡まれたのだそうだ。

そして、その相手から逃れようと少し押した……それが、尊の命運を分けた。

押された相手は運悪く、否、自分がポイ捨てした空き缶によって、自業自得にも転んだ。

たかが転んだだけだったが、見かけから弱そうな尊に転ばされたのは、酷くプライドが傷ついたのだろう。

しかも相手は厄介なことに不良グループのボス。いわゆるガキ大将だった。

……それからは只のリンチだったという。持っていたものは全部壊され、金品も盗られ、噛いながら空き缶を捨てるがごとく、道端に捨てられたそうだ。

「……………」

「慎、変なこと考えちゃだめだよ?」

押し黙った慎を見て、尊は察した。

短い付き合いだ、彼のことを理解しているつもりだ。

一見、運動が好きな普通の中学生のくせに、その実異常なほど情に厚い。

捨て猫、捨て犬を見つけたら放っておけず、二人で親探しをしたのはいったい何回だったか、数えていない。

「アイツら、ヤクザ者の知り合いもいるっていうから……慎、運動神経が良いのは知ってるけど」

「わーってますよ。あのさ、僕が頭悪いからってそんな直情的なことするわけないじゃん」

「そう?」

「そーそー」

にこやかに笑う慎。

心配かけまいとしているのだろうか、それとも――。

「慎？」

「あつと、僕そろそろ行かないと。学校サボってきたからさ！ばれると怒られちゃうぜ」

「まこと!!」

そそくさと病室から出ていこうとする慎の袖を、尊は痛む腕を無視し、慌てて掴んだ。

この友人は馬鹿だ。笑顔を浮かべても、その強く握りしめた拳を解くことを忘れてている。誤魔化すというのが、とことん苦手なのだろう。

「ダメだよ？わかってるよね？」

「……心配性だなあ」

あくまで優しく尊の手を解くと、慎は笑顔で言った。

「僕が約束を破ったこと、今まであつたっけ？」

「あつた。慎は時間にルーズだし、そもそも校則だって今この瞬間ぶっちぎってるでしょ」

「タハハ、こりやしっけい。……じゃあ安心しろって」
「？」

慎の言いたいことが分からず、思わず疑問を表情に出してしまう。

彼は馬鹿だ。きつと、この言い訳も凄い馬鹿なことを言うに違いない。

「いつも通り、遅れようと規則を破ろうと、僕は僕のやりたいようにやるだけだよ」

後悔するだろう。きつと、後になって何やってんだと言うだろう。

でも構わない。激情が慎の中で渦を巻いていた。あふれ出ようとしていた。

これを我慢しろって……そんなの絶対嫌だ。

「だから大丈夫。ちやーんとやりたいことやったら帰るからさ」

「……バカだなあ。帰るから何してもいいってわけじゃないでしょ

？」

「僕あそれくらいしかルール無いから。諦めろって、振り回されんのはいつものことでしょ？」

ああその通りだった。尊には慎を止める術など元より持ち合わせちやいない。

彼はこのまま喧嘩を売りに行くのだろう。それなのに、尊にはそれを止める手段なんて何もなかった。

「きつと後悔するよ」

「だろうね」

「…………絶対、ぜーったい、後悔するのに、ばかだなあ」

「そうだな、今してるしな」

ぽたぽたと涙を溢し、泣きだす尊を見ても慎は行動を変えようとならない。

仮にも尊のためならば、この時点で止まるべきなのに、むしろ怒りが増すだけだった。

「じゃ、いつてくらあ」

尊は、出ていく慎の背中を見つめることしかできない。

彼には動く力がない。戦う術がない。その意志だって、持ち合わせではない。

でも彼は五体満足で、戦う術は知らなくとも理由があつた。

友のためなんていう奇麗ごとではなく、只々気に入らないという……きつと不良と変わらない理由。

「——いつてらっしやい」

そんな男なのに、尊はそれでも返事を返した。

例え行動理念が不良のそれだとしても、自分を害した彼らとキミは違うよ、という……気弱な少年の、ささやかな抵抗だった。

そしてその日、ある不良少年たちが一人の少年によって、軒並み病院送りにされた。

そしてさらに数日後、一つの暴力団が、これまた一人の少年にカチコミをかけられ、壊滅したという。

その少年の名前は稲津慎。只の中学生だった、立派な不良である。

「——マコくん、起きてください」

「ん……？」

ゆさゆさと揺さぶられ、目が覚めた。

目が覚めると巫女服の白ツインテール女兒……というどブツコロされるので、急いで口を閉じる。

「今、変なこと考えませんでした……？」

「考えてないデス！」

朝っぱらから帯刀している彼女に逆らうことはせず、敬礼をして無罪を主張した。

無論、何も考えていないわけはなく、この小さな兎鬼め畜生うさぎつ子と心を読められたら一発ギルテイな憤。

(……あの日、色々経験したけど……)

殴り、殴られ、蹴り、蹴られを繰り返したあの数日間。

ドスなんて言うのを振り回されたし、拳銃だって向けられたあの濃い時間。

何も知らなかった自分は殴る感触が気持ち悪かったし、殴られるのは痛かったし、怖かったし、涙だって溢した。

それでも自分にはそういう才能があったらしく、色々と特殊な体質のおかげもあって、納得のいく勝利を得た。

だが、しかしそれでも——。

(このちっちゃな白兎に勝てる気がしねえのは、なんでだろなー?)

その抜刀術は不可視と呼ばれる程素早く、だがそれでも迫る銃弾よりは避けることに現実味があるはず。

だというのに、彼女に勝てるイメージが湧かなかった。

そもそも喧嘩をしたいとすら思えない。おかしい、ほかの天下五剣は追いかけてつこをしながら、それでも向けられる敵意、剣気に思わず武者震いしたというのに……。

「……？ 何をぼさつとしてるんですか？ 早く着替えてください」

「あ、ああ……ってどうか、前も行ったけど出て行ってくれない？」

盲目故に着替えを覗くということは出来ない。

だからと言って同じ部屋にいる男子が着替えるのに、堂々と仁王立ちというのはどうなのだろうか？

「前科として、着替えるといって窓から飛び出したりしなかったら、出ていったんですけどねえ……？」

「あ、ハイすみませんでした、僕が悪かったです」

「ええ、ですから諦めて着替えてください」

「はい」

尻に敷かれている現状だが、しかし嫌な気持ちではない。

……これが尊だったら、からかつていじくり倒すのだが、それは何だが生にくい。

いや、これでも彼女をからかうのは中々に面白いのだ。若干命懸けではあるが、むくれるところとか凄く可愛いと思っっている。

「……そんなだから、調子が狂うのかなあ？」

「何のことですか？具合でも悪いんです？」

「あー、いや単なるひとり言だよ。今日も今日とて五体満足ですよ」と

「ひゃっ」

着替え終わると、荷物を手に取りついでに月夜を肩に抱えた。

「い、いきなり何するんですか」

「んー、いやだって月夜に歩幅合わせるの大変でさー」

「何ですか、喧嘩売ってるんですか？——あ、今日の朝はおにぎりです」

「タハハ、怖い顔しないでよつとサンキュー」

彼女が握ったであろうそれを加えながら、タツタツと軽い足取りで駆けていく。

少女とはいえ荷物を抱えたまま走るのは中々キツイものがあるはずなのだが、これを彼はあつさり行う。

これは、彼が起こした事件の副次効果のようなものだ。

あの一件から、彼は脳の機能がおかしくなった。

肉体的に苦しかろうとそれをそう思えることはなく、思ったとしても無視できてしまう。怪我を恐れることも無くなったし、素の力と体

力も上がった。

医者曰く、一種の火事場の馬鹿力らしい。脳のリミッターが外れやすくなっている上に、一種の興奮作用のある脳内麻薬を一定量出し続けているのだとか。

普段は一般人より少し頑丈程度だが、その気になれば彼は難なくコングリートを打ち割り、銃弾にも怯まず、それどころか走馬燈の応用で体感時間を極限まで引き上げ避けてしまうほどだ。

ただ、言われなくてもわかることだが、これは体を壊す行為である。自壊する彼を、脳内麻薬によつて自覚できない彼に止めることはできない。

今日は朝から変な夢を見たせいだろう、そのリミッターが外れだしていた。

「ていつ」

「あいたつ」

そして、だからこそ因幡月夜がお目付け役として一緒に居るのだ。

「ちよつと張り切りすぎです。落ち着いてください」

「えー、いつもこんなもんじゃない？」

「何時もの貴方は、面倒でも私に歩幅を合わせて歩きます……深呼吸してください」

「えー、なんでさ」

不良であるからこそ強く、一般人であるからこそ脆い。

こうなった理由は喧嘩による怪我の外的要因と、精神的な内面的要因の両方のせいだと、医者は告げていた。

自業自得だと彼は笑うが、これは簡単に受け入れていいことではない。

リミッターがない状態だと常人の約5倍以上の力を発揮する。これはつまり、単純に言つて常人より数倍壊れやすいという意味でもあった。

「……私は、貴方に傷ついてほしくありません。いうことを聞いてください」

真摯に誠実に、言葉を届けようと静かに慎に語り掛ける。

そうすればこの人はちゃんと分かってくれる、そう信じているから。

そして事実一瞬目を見開いた後、慎はゆっくり月夜を降ろすと深呼吸をした

「すうーはああー……悪い」

「いえ、この役目は私が望んだことです。それより、貴方は病人だという自覚をもつと持つべきですね」

「そういわれたってなあ」

こうなつてから彼の代謝も変わった。

多少の怪我なら一日で完治してしまうのだ。

これは良いことではなく、本能的に死なないように必死に自然治癒を上げているからだという。

人の細胞には限界があり、この行為はそれを早めるもの——つまり、彼は寿命を縮めているのだ。それも完全にタガが外れた状態だと、5倍以上の速さで。

だというのにヘラヘラと、全く。

「あなたは、大バカですね」

「アハハ、ガツカリした？」

「いいえ、病弱という意味なら私もですから。人のことは言えません」
特殊な家柄のせいで色々と体に不調をきたしている月夜にとって、それは他人ごとではない。

きつと、月夜も慎も長生きは出来ないだろうと、何となく察していた。

でもこのままだと確実に慎の方が先に逝ってしまう。碌に思い出も作れず、きつと満足した顔で……それは、心底嫌だから。

「早く治しますからね。私、こう見えて厳しいんです。ビシバシいきますよ？」

「ハハ、おつかねー」

「ちなみに、治すと言ってもリミッターの切り替えが自在にできるようになつてもらおうという意味ですよ？ 貴方は武の才能あるんですから、そうしたら抜刀を覚えてもらいますからね」

「その心は？」

「私が教えたいからです」

ふふん、と機嫌よく将来の希望を伝える月夜。

はいはいと流す慎に、一体どれだけそれが本気なのか伝わっているのだろうか？

抜刀の達人が、直々にそれを教えたいというのがどういう意味なのか、そうする行為がいったいどれだけ乙女心も入り混じっているのかなんて、きつと彼には理解できていないだろう。

「ホント、大バカですね」

「バカバカ言うなよ、へこむぞ？」

「事実ですから。あ、バカついでと言っては何ですけど」

「ん？」

「来週あたりに一人新しい問題児おバカさんが転入してくるそうです」
「うわー」

そりや可哀そうに、と顔をしかめる慎。

学校中を敵に回すのだけはやめてほしいと、過去の教訓から祈るが、その願いを真つ向から破られることになるとは今は知らない。

「まあ私たち中等部ですから、直接かわることはないと思いますけどね」

「アハハーそりやフラグっていうんだぞー」

新たな問題児——納村不道のむらふどうが学園にやってくるまでの一週間。

この一週間は比較的穏やかだったと、フラグを実体験した後の慎は語ったという。

転入生は話題になる

月夜は衣食住を共にすると言ったが、実際四六時中一緒というわけではない。

住んでる場所は女子寮の横に簡素なテントが張られ、そこで暮らしている。ちなみに作ったのはエヴァさんだ……恰好のせいで勘違いされがちだが、あの人、一応性別は男なのだ。細腕に見えるが、テントを張る筋力は普通に持ち合わせている。

食事は月夜が従者であるエヴァさんと一緒に作ったり、一人で作ったりして持って来てくれるが、逆に言えば彼はそれ以外を食べることを禁止されている。

着ているものは学生服……ここまでは一緒だろう。

だが、一つ違うものがある。それは——クラスだ。

「なぜ此処まで一緒なのに、一番大事なところがずれているんでしょうか……ガツカリです」

「いや、転入生の僕に言われても」

転入してくると判明した時点ですでにクラス分けは決定していた。

人数が足りないクラスに自動的に割り振られた後では、流石に決定を覆すのは面倒なのだ。

いくら五剣といえど、それを決めたのは学園長……もとい、その上の理事長である。

「……つい話したのは間違いだったかもしれない」

「なんのこと？」

「いえ、なんでも」

小学生の時、友人が出来て嬉しさが絶頂だった時と、慎が中学生になって別れが訪れて最悪だった時期にちよつと心中を溢した事がある。

それが彼女の付き人に聞かれ、そのまま伝わったのだろう。

色々と愉しそうな表情を浮かべているであろうことが、容易に想像できてしまった。

「おっ」

「どうしました?」

「ああ、いや……」

この学園は高等部と中等部の真ん中に大講堂があり、校門はその近くにある。

よって、この周辺が一番生徒が多い。武装少女に化粧男子……その中で一人、普通の格好をした高校生がいた。

恐らく以前月夜が言っていた転入生だろう。

(なるほど、確かに目立つ……人のこと言えないけど)

この間、斬々先輩に言われたことを思い出した。

確かにこの様相の中、一般的な学生の格好というのは目立つのだと。

「おお?」

「あ」

「はい?」

少し見過ぎたのだろう、視線を感じられて転入生が振り向いてきた。

「おお、なんだなんだ。普通の格好の奴もいるじゃねえか」

「バカ、アンタそいつは特例よ!」

「?」

図体のでかい化粧男子が転入生にツツコミを入れて止めているが、はて、特例とは?

思い当たるのは隣の月夜さんだ。確かに五剣のお目付け役がいつもそばにいるのは、特別なことなのかもしれない。

「特例?」

「ってなんで本人まで疑問顔なのよ!」

「あーいえ、自分の事がどう言われてるのかあんまり気にしたことなくて」

というか、気にしたくないというのが本音である。

陰でロリコンとか言われて後ろ指さされてしまっていたりすれば、化粧男子ほどではないかもしれないが、かなり痛々しくてやってられない。

「天下五剣に認められてる実力者よ。転入以来素行が悪くないから、特に何も言われない、この学園で現在唯一自由な男よ」

「へー……その天下五剣って警棒じゃなく、たしか特別に帯刀してるやつって話だけど……もしかしてえ？」

自分のことを話されたと気づき、顔を転入生に向けたことでリン、と月夜の錫飾りが鳴った。

「ええ、私が天下五剣……と、呼ばれている者の一人です。今日は貴方についての会議があると聞いてますよ、問題児さん」

「へえーおたくが……って、出なくていいんかい？」

「ええ。私は彼のお目付け役ですから。貴方がよっぽどな噂になることがない限り、不干渉を通すつもりです」

そいつは難しい話だと聞いていた生徒たちは内心呟いた。

彼女の耳は校内の出来事を聞き分ける。つまり、噂なんて小さなものから大きなものまで、全て拾えてしまうのだ。

転入生が初日にやらかさないわけがなく、絶対なにかしでかすという予感があった。

「ま、お手柔らかに頼むぜえ」

「ええ、私も面倒ごとはごめんです」

「じゃ、僕らはこれで失礼しますね、先輩方」

「納村不道。納村だ。アクセントは頭に頼むぜ？」
のむらふどう

「……稲津慎です。好きに読んでください、ノムラ先輩」

「因幡月夜です。問題はほどほどに、頼みます」

「オツケーー！またな！」

それぞれ高等部と中等部。学校は此処を中心に分かれているため、それぞれのクラスへと向かう。

そんな中、月夜がふと振り返った。

「……あの人、もうお友達が出来てましたね」

「あー……」

そう。この少女は友達百人という、まるで小学生のような目標を持っている。

年齢が数えて10歳なのだから、間違っていないのだが、それはそ

うとして別の意味で転入生が気になったようだ。

まああの化粧男子と交友関係を持つというのは中々難しいだろう。

(……………あれ?)

そこでふと気づいた。

化粧男子からは遠巻きに見られているだけであり、武装少女で自分に話しかけてくれるのは、月夜くらい。

もしかして、いや、もしかしなくても彼と彼女は似た者同士であった。

「……………僕らも、もう少し他と関わりもとつか」

「そうですね……………少し、話しかける練習をしましょう」

「うん」

そこで話しかけるのではなく、練習と言ってしまうあたり、この二人のコミュ障加減が今どれくらいなのか察せられる。

そんなことがあったのが、早朝のこと。

彼、納村不道はホームルーム前から、さっそく問題を起こしていた。

五剣の一人、鬼瓦おにがわら輪りんと斬り合いを行ったのだ。

場所は大講堂前。どうやらそこまで納村不道が走ってきたらしい。

結果は、納村不道の恐らく唯一の技、『魔弾』で決着がついたという。らしいというのは、全部聞いていた月夜から後聞きで、それも昼食を食べながら聞いているからだ。

「それで、その魔弾ってというのは?」

「まだ一度しか聞いていないので……………恐らくですが、腸腰筋と仙腸関節による推進力を、螺旋状に手首へと伝えた、一種の寸勁に近い物でしょう」

「そこまでわかるとか、流石だね」

「いえ、恐らく同門でしょう。足さばきに似たものを聞きましたから」

「同門? 抜刀の?」

「いえ、どちらかというとき雲耀の方です」

雲耀というのは、稲妻の速さを例えとしている彼女の技だ。

不可視の足さばきに、不可視の剣閃。昔散々見せてもらったからわ

かるが、あれは人間離れしている。

「ですが、どうも腑に落ちません。未完成というか、不出来というか……半端な感じですよ」

「へえ……ん？あれ、もしかして月夜、魔弾撃てる？」

「ええ、あと一度か二度聞けば再現可能ですよ。雲耀使いの私が真似できないわけではないですよ」

「そりや凄いな」

「というか、必殺技を完コピ出来るって、先輩泣きそう……そう思ったが、目の前でえっへんと胸を張っている月夜が可愛いので、野暮なことは言わないでおくことにした。」

「にしても鬼瓦先輩に勝ったんだな、あの人」

鬼の仮面の一部をいつも身に着けている先輩、鬼瓦輪。彼女は特殊な呼吸法によって、その細身からは信じられない力を発揮する、剛の剣を得意としている。

勿論技も大したもので、追いかけてこの際一番斬られたくない人でもあった。刃挽きしてあるとはいえ、下手すれば斬れるし、そうでなくとも骨折は免れない。

避けて物使って逸らして、必死こいてノーダメージで倒した苦労を思い出していた。

「まあ最後の最後、足をくじいていましたから。あれで決められなかったら、負けていたでしょうけど」

「そうなの？ってか、魔弾って脚使わないんだ」

「使うのは腰ですよ。ですから、態勢は別に関係ないんでしょうね。座ったままでも撃てるはずですよ」

「そりやすげえや」

どんな格好からでも撃てる必殺打撃。

そんなものを扱えるのだから、相当鍛錬したのだろう。

「今までの不良とは違うみたいだね」

「ええ。ですが、だからこそ厄介でもあります」

「というっ？」

「貴方のような前例がまた生まれそうだという事ですよ」

そうやって月夜が見せてきたのは、一枚の紙きれ。

しかし、その紙には五つの印が押されている。

『外出許可証』——品行方正で、五剣に認められなければ得られないそれ。

月夜が持っている理由は簡単で、彼女が管理する代わりに出かけたければ、彼女とエヴァの二人を連れていくことが条件付けされているからである。

本来は五剣二人以上が付き添わなければいけないのだが、月夜は学園長と理事長が知り合いだから親戚だからで、特別な許可をもらつたらしい。

「……あれ、特例つてもしかしてそれ？」

「まあその証でしょう。五剣に認められるには、実力を示すのが一番手っ取り早いですから、彼ももしかしたら取れるかもしれません」

「ハハハ、そいつは大変だ」

慎が許可証を得られたのは追いかけてこの経緯があるからというのも勿論ある。

五剣のうち四人＋熊を相手にして辛勝したという事実は揺るがない。

しかし、そのうちの一人である目の前の少女とは戦つてもいない。それどころか、許可証を得られた理由の半分以上は、この少女の口添えがあつたからこそだ。

つまり、慎は月夜という少女との繋がりがあつたからこそ得たものであり……五剣最強であるこの少女に実力を示したわけではない。

これから先、先輩が自由を手にするまでの苦勞を考えると、思わず合掌してしまいたくなる慎だった。

思い出という名の黒歴史

次の日も納村不道はまた斬り合いを行った。

レジーナデツレファルファッラ

女王 蝶とかいう長つたらしいあだ名というか、二つ名で呼ばれてるような呼ばせているような、そんなちよつと厨二入ってる女子生徒。

名前は……蝶なんかぼらがさきか薔薇咲。長くて覚えていないが、五剣の一人に憧れて金髪の鬘と青いカラコンをしているらしい。

それと、月夜のクラスメイトでもある百舌鳥野もずののという、片目が髪で隠れてる真面目系女子。

この二人は五剣次席と呼ばれる中学生で、薔薇咲は鞭使い。百舌鳥野は小太刀使い。

特に百舌鳥野は五剣の鬼瓦輪先輩に直々に教えを受けているらしく、次席というのはほぼほぼ確定だろう。

妹分一人一人は未だ五剣以下だろうが、二人そろって相手をして勝つというのは中々に至難だ。

しかもその次の日には早速違う五剣とやり合っている。相手は亀鶴城きかくじょうメアリ。フランス人と日本人のハーフで、フェンシングの使い手。

神経上痛覚が強烈な所を突いてくるDSでもある。

ちなみに、薔薇咲が慕っている五剣というのはこの人のことだ。

(あの人とはもうやりたくないなあ……)

慎は別に喧嘩好きというわけではない。そもそも痛いのは嫌だし、辛い。

なるべく味わいたくないそれを狙ってくる相手というのは、二度と戦いたくないと思わされるには十分だった。

「にしても五剣の二人とこつとも連戦するなんて、やっぱり許可証ほしいのかな?」

「でしょうね……まあ貴方の時の様に大ごとになっていないようですよ」

「いやー、あれは花酒先輩が悪いって」

花酒 蕨先輩。

五剣最年長であり、五剣一の問題児だ。

慎の逃走を、なぜか追いかけてしまった張本人でもある。転入生が来るたび、問題を起こすたびに通称『ワラビンピック』という競技に変えては学校中を引つ掻き回す。

この人が五剣とか、色々問題じゃね？と思うが、それ相応の実力があるうえに、このお調子者な彼女は結構いろんな人に好かれている。人徳も兼ね備えている実力者、まさに手が付けられないというわけだ。

「あの人の行うことはいつも唐突で、何より理不尽ですが……ちゃん報酬は約束してくれる、意外と律儀な人でもあります。私としては、彼女のおかげでスムーズに物事が進んだので、特に文句はないです」

「あの人のせいで一クラスから中高交えた全校生との追っかけっこになったんだぞ？」

「でも、おかげで自分の現状がよく分かったでしょう？」

それはまあ、ミツチリとね。

慎の際に行われた『追いかけて』とは名ばかりの、一対多の虐殺劇。

それをふと、思い出してしまった。

事の始まりは、転入初日のこと。

先生から化粧男子や武装女子の説明を受けながら、内心最悪だとガツカリして向かった自分のクラス。

当初は目が腐るかと思っていたが、今では慣れたものだから何とも言えない。

「えつと……」

ホームルームで転入生の自己紹介……ありきたりなのに、この目の前の非日常具合である。

何と言えはいいのだろうか、それとも名前だけ名乗るべきなのだろうか。

女尊男卑極まっているこの惨状に目を瞑りたくなりながら、戸惑ってしどろもどろになっていると、唐突にクラスの扉が開かれた。

「へ?」

『!?』

現れた少女に戸惑いが深まる慎と、教師含め驚く教室の一同。

「どうも」

「い、因幡さん?どうしたの、今はホームルーム中……」

「いえ、五剣の決定を説明しなければいけなくて、参上しました」

どよめき立つクラスを無視して、迷いなく目の前で歩いてくる少女、因幡月夜。

思い出すのはあの速過ぎて見え難い三瞬斬撃。

相変わらず腰には模擬刀を下げしており、巫女にも似た服装をしている。

「つていうか、あれ?月夜ちゃー因幡ちゃんつてまだじゅ、いや、九歳じゃなかったっけ?」

「ええ、そうですよ。でも、今の私は中学二年生です」

「なんで?」

「飛び級しましたので」

「へー、そうなんだ。すげえなー」

「ふふ……」

エツヘンと胸を張る姿に、つつい懐かしくなつてよしよしと頭を撫でる慎。

その行動は今思えば相当失礼なことであり、同時に撫でられ心地を受け入れている月夜があり得なくもあり、クラスが呆然としていた。「つて、そうじゃなくて。いま五剣つて言った?五剣つて、先生が言つてたあの天下五剣?」

「ええ。五剣の決定は、ホームルームよりも優先されますので」

「へー。僕、まだ転入初日なのにいったい何が……」

「コホン」

誰がどう見ても嬉しそうに、因幡月夜は頬をほころばせながら言い放った。

それはもう堂々と、決定事項だと断言をした。

「私が貴方の矯正を行います。故に——今日から衣食住を管理させてもらいます」

「……………あ？」

「つまり、今日から一緒に行動するということです。クラスは違いますが、授業以外はちゃんと私のところに来てくださいね？」

「……………あ？」

衣食住を管理？

授業以外は月夜のところに通え？

「……………痛い」

「何をしているんですか？」

「いや、夢かと思って頬を……いや、えつと、え？」

「？」

本当に？本気？と疑問符を投げかけるが、彼女はこちらが何を言いたいのか分からず小首を傾げている。

ああ、これあれだ。決定事項だ。

「いやいやいや、いくら何でもそんな、冗談でしょ？」

「いえ？冗談ではありませんよ？」

「……………」

このロリっ子、一体何を言っているのだろうか。

やっぱりあれだ、これは夢なんだろう。

そうだ、そうに違いない。痛みまで感じるなんて初めての夢で驚かされる。

小学生の最後の方で交友関係となった相手が飛び級してきて同学年で？しかも自分を矯正するとか言って四六時中一緒に居るなんて、そんな都合のいいこ、と——。

「目覚めろ、僕うううー!!!」

気づけば窓からダイブしていた。

飛び降りれば夢から覚めるかと思ったが、そんなことはなかった。取り合えず所々にあるでっぱりを掴んで勢いを殺しながら降りる

と、改めて走った。

「そもそも何が都合がいいだまるでこの状況にとても喜んでるみたいじゃん僕はいったい何を嬉しがっているって? いやいやいや違いますから旧友が夢に出てきて嬉しいだけですから!! 決して、決してそんな趣味があるわけねえだろおおおおおおお!!!」

一体誰に何を弁明しているのか、自分でも何を叫んでいるのか、さっぱり分からないまま慎は走った。

「……………」

「え、えつと、因幡さん?」

呆然とする月夜に、この惨状に巻き込まれた代表として、クラス委員長が話しかけた。

いきなり逃げられて怒っているのだろう。そう思っておずおずと腰を引きつつも勇気を絞り、どうにか機嫌を取ろうとも思っていた。

だが、誤算が一つ。

「……………グスツ」

「ふえ?」

「う、うううううつつ」

(え、泣、え?!)

本人が思っていた以上にショックを受けていたことだ。

いつも冷静沈着で、音によつて校内を把握し、様々な外敵^{転入生}を斬つて捨ててきたあの魔物^{子鬼}が、必死にこらえているが、涙目——!?

「えと、えつと……………みんな!!」

混乱した委員長が、混乱したまま一つの決断を下した。

これが、直ぐに校内全域に広がることとなるのは、その時は誰も思っていないかっただろう。

「早く、^私転入生^の手^に負^えない^わのよ!!!」

そうして、慎の長い一日の始まりとなった。

中等部のクラスが一つ、廊下を駆け出し外へと出ていく。

そんな騒ぎを百舌鳥野や薔薇咲が聞き逃すわけもない。

いの一番に駆け付けてきて、ボコボコにして連れて行こうとしていた。

「女子を泣かす非道な悪人、許すまじ、ですわ」

「そうなのです。絶対土下座させるのです！」

月夜が涙目になった件がどんなねじ曲がり方をしたのか、初日から女子生徒に酷いことをして泣かせた極悪非道な転入生ということになっていった。

天下五剣が泣いたとは信じられなかったらしく、女子生徒という曖昧な人物表記となったのは、月夜にとって幸いの一つだった。

「アハハハハハ、武装した女子生徒に追い掛け回されるとかナニコレ。てか鞭こわっ!？」

この時、ある意味夢見心地だった彼はリミッターが緩んでおり、さらに現実逃避のため脳内麻薬が過剰に分泌されていた。

フラフラと鞭や警棒の軌道を見切って避けていく。

時折クルクルと変な回転で避け笑うその姿は、若干名の女子から引かれていた。

そしてそんな大騒ぎをしながら、高等校舎まで逃げたのが運の尽き。

「これはいったい、何の騒ぎだ」

「あ、輪お姉さま！こ、これは、その……」

言いよどむ百舌鳥野を一度見た後、顔を覆う鬼の仮面をつけた少女はジロリと慎を睨みつけた。

「確か、今日来たばかりの転入生だな」

「え？ええ、そうですけど……」

「この騒ぎは何だ？貴様の矯正は因幡に任せただが」

「……」

ピクつとその名前に反応する。

そして、彼女が日本刀を帯刀しているのを見た後——言葉を投げかけた。

「……先輩って、天下五剣って人？」

「ああそうだが？それとこの騒ぎに何の関係が——!？」

ドンツと距離を一步で詰めた慎に驚愕する鬼瓦輪。

「月夜ちゃんが僕の矯正係で四六時中一緒に居るようになってかそんなふざけた決定を下した、あの五剣ですか!？」

「は?……ハア!？」

そしてこの時、不幸にも一つ慎が勘違いをしていた。

何時も模擬刀を帯刀していたのが普通だった月夜が、五剣の一人だなんて思っていなかったことだ。

つまりこの時、彼の中では無垢な月夜に変な命令を下したおかしな連中〓天下五剣、という凶面が出来上がっていたのだ。

「冗談にしても酷くないか、というか月夜ちゃんに一体何を命令してるんですか、つうか社会的に僕を殺したいんですかそれなら実力行使でいっそ殺せええええええ!!！」

「ちよ、ちよと待て。落ち着け!!！」

肩をグラグラ揺らされながら、鬼瓦輪は慎が混乱していると察した。

一喝して落ち着かせようとするが、それはむしろ逆効果となる。

「落ち着け?あのなあ、武装女子は別にまあ慣れてっし問題なかったけどさ……転入初日から化粧男子とかヤバイもんを見るわ女子の目つきは怖えし、月夜ちゃんがなんか凄いいこと言い出すし、追っかけまわされるし鞭めっちゃ怖いし……限界なんですよおおお!!！」

ここに至るまで鬼瓦輪が理解できていなかったことは、慎の精神があまりにも一般人のそれだったということ。

(いったい、どういうことだ?)

不良グループを打倒し、暴力組織を壊滅させたという不良。

想像ではもっと荒々しい物だと思っていたため、勝手なギャップに戸惑ってしまう。

「よく分からんが——離れ、ろ!!！」

「おお!!！」

抜刀し、刀を振るうことで距離を取らせた。

一度ぶっ飛ばして物理的に落ち着かせた方が早い、そう決断した彼女はさらに刀を振るう。

振り上げたそれを振り下ろすだけだが、それも相手の視線を考えて振るえば一つの技となる。

鹿島神傳直心影流——刃隠の剣！

真正面からでは手元によって刃が隠れてしまう、もとい隠すことで相手に太刀筋を読ませない技。

刃が見えた時にはすでに眼前に迫っており、避けることは不可能——の、筈のそれを、慎は避けて見せた。

「あつぶな」

「……今、どうやって?」

「え? いや、普通に?」

そう、普通に見て避けた。彼にとつてただそれだけだが、どれだけおかしな動きをしたのか、自覚は持っていないかった。

振り下ろされた刀を見つめる胆力も凄いが、それ以上に見てから動いたのでは普通避けられない。

なのに無理やり避けて見せた。

「なるほど……そういうことか」

「?」

「お前のことは聞いている。常識が通用しない、と」

「失礼だな!」

「事実そうだ、ろ!」

「うわっ!」

今度は見ずに避けた。

「今度はどうやって避けた? 勘か?」

「え、まあ、そうですね……?」

「なるほどなるほど、文書通りというわけだ」

この時、彼女の脳裏には丁寧に読み解いた慎に関する書類の内容が浮かんでいた。

まず、リミッターが外れていること。

これによって常識外の動きを見せる。さつき一步で近づいてきたのも、見て避けるという離れ業もその一つ。

さらに脳内麻薬の効果によって倫理観や危機感が薄れている。近

づいてくる刃を見ていられる事から納得した。

そして、暴力団組織とのやり合いの中で生まれた、刃物や銃弾等といった物にさらされたことで得た、身の危険に対する潜在的な恐怖心。

脳内麻薬ではどうしようもない、本能に刻み込まれた恐怖は、並外れた回避能力につながっている。

(リミッターを外す行為にも限度がある。行き過ぎると直ぐに体が壊れると書いてあったことから、今は緩んでいる程度なのだろう……早めにケリをつけねばな)

そして、文書の最後に書かれていた最重要事項。

未だ彼は上記をコントロールできていない。そのため、一度緩むと自力で再度掛けなおすことが困難。

故に――。

(第三者によって、物理的、もしくは精神的に落ち着かせなければならぬ)

転入初日で精神も昂っており、ただでさえ緩みやすい状況。

その中での混乱。慎の枷はどんどん外れていっていた。

「どうやら色々誤解があるようだが――悪いな、私にはこれくらいしかしてやれん!!」

「わわ!? ちよ、ギャー!!」

意を決して刀を振るう鬼瓦輪に対し、一件ふざけた様子で避ける慎。

本人は凄く真剣で、寧ろその真剣さのせいで動きが並外れていく。

足捌きは素人なのに、動きがハチャメチャすぎて読み取れない。

「ハあああ――んんん!!」

「ッ」

鬼瓦輪が特殊な呼吸をした瞬間、ソツと圧と上がったように感じた慎は、近くにいた女子から警棒を素早く奪うと、振るわれた刀に当てて弾いた。

(阿吽の呼吸での全力の振り下ろしを、片手で!?)

(手がちよつと痺れたぞ、何なんだこの人?)

両者ともに驚くが、驚きの内容が違っていた。

慎はど素人。故に、パーリング逸なんて意識していない。そのため、真正面から刃と棒が交わったことになる。

阿吽の呼吸というのは、いわば無駄ない筋肉の使用になる。正しい姿勢で振るわれる刀の威力は相当なものであり、それを無駄ない力を絞って振り下ろされたのだ。刃挽きされているとはいえ、人の骨程度ならばバキバキにできてしまっただろう。

そんな威力を、一見軽い様子で弾き飛ばしたのだから、驚きはかなりのものだった。

「ちよ、と、うわい?!」

三斬ほどで警棒はひしゃげ、使い物にならなくなってしまった。

逃がさないように遠巻きに囲んでいた女子生徒は、苛烈になっていく鬼瓦輪の攻撃の邪魔にならないようにと、距離を取ってしまった。

そのため、近場のレンガ石ころを掴んで刃に当て弾く。

「私の振るう刃に、此処まで合わせてくるとはっ」

「いや、だって防ぐ方法これくらいしか、っ」

目がいいだけではすまされない。動体視力が常軌を逸している。

だが、これはリミッターがどうこうではない。

月夜の一瞬三斬を必死に見ようとし、そして見続け憧れてきたのだ。速度でずっと劣る彼女の剣閃に合わせて動くだけならば、たやすい。

小学生時代の人間離れた出会いと技は、観るだけでも彼に力を与えていた。

「おっ？」

防いでいた慎が、一瞬斜めに当てたことで始めてパーリング逸が出来た。

その偶然の一度でジャリツと軽い手応えで刀を防げたことに気づいた。

「なにっ？」

そしてその一度で、彼はモノにってしまった。

振るわれる刃を次々に逸らしていく。

(これは、長期戦はまずいか……もとより、そんなつもりはないが!)
慎の天性の冴えと感性に驚きながら、冷静に追い詰めようとする。
逆に慎は鬼瓦輪という少女の刃を逸らせるようになったことで、相手の技量の高さを感じ取り、称賛を挙げていた。

不良にも暴力団にも、何人か武道を嗜んでいた人がいた。

その人たちのせいで刃や銃、いつそ拳、掌にすら恐怖心が根付いてしまったのだが、お陰で彼女の力量を正確に測れることが出来ていた。

「つつよいなあ、ほんとに高校生ですか!？」

「その私を相手にしているお前は、一体何なんだ!!」

言いながら、決めに入る。

剣筋が足元に変化し、それを避けられた瞬間斬り上げ、それをいなされた途端に振り下ろす。

三コンボのそれは、初心者にかしろというのは酷な話だ。

相手が普通の者ならば、確実にこれで倒れていただろう。

「——ただの、」

だが、慎はそうならなかった。

リミッターが緩むのは、別におかしいことではない。大声を上げれば緩みやすく、ハンマー投げの選手などが叫ぶ理由、その例の一つとして挙げられる。

だが、火事場の馬鹿力と呼ばれる程外れるのは、基本危機的状況だけである。

その領域まで簡単に足を踏み入れるその精神は、絶対どこか破綻しており——。

「不良だ……よ!!」

「ッ」

——ただの粹に収まらない普通ではない。

足元に変化した刀を一步、軽く下がり片足を上げ、渾身の力で振り下ろした。

刃挽きしてあるからできた行為。自分で壊さない為に丈夫な靴を

履いているとはいえ、本来なら足が真つ二つにされかねない。

だが、頑丈な靴と刃挽きしてある刀。そして何より、常識はずれの馬鹿力によって刀が地面に沈んだ。

そしてそのまま逆の脚を振り上げ、彼女の顎を掠めた。

「ほいっと」

「な、あ!？」

脳を揺さぶられ、感覚がおぼつかなくなった所で肩を押すことで、彼女を倒した。

五剣の一人を倒したその事実によりが驚愕し、言葉を失くす。

慎を畏怖やら怒気やらの視線が集中される中、居心地が悪くなった彼は……。

「えっと……し、しつれいしまーっす」

苦笑いを浮かべながらそそくさとその場を再度走り去っていった。

「くっ、待て……ダメか。のの、携帯を」

「……は、はいなのですー!」

五剣の一人として、このまま放置はできない。

だが、彼女は動けそうになかった。

故に、方法は単純明快。他の五剣への通達——そしてそれが、慎にとつて災難となってしまう。

「ほほう、ずいぶん面白そうな転入生じやの。しかし、手のかかる小僧だ」

花酒蔵は少し考える。

流石に人を殺すことまではしようとは思わなかった。目的は矯正、だがそれだけではつまらない。

しかし今度の転入生は種目を多くそろえると自滅しかねない。

故に、彼女は今の状況をそのまま使うことにした。

『ぴんぽんぽんぽーん、なのじゃー!』

放送室に飛び込んだ彼女は、そのまま特大イベントを発表した。

『さあさあ、皆の者よく聞くがよい。今宵のワラビンピックの開幕じゃー!』

「は、え? わ、わら……なんて?」

愉し気な声と、周りも静止したことによって思わず慎も足を止めてしまう。

『ちよいと急だったので種目は一つのみ！転入生の……えっと、稲津慎、こやつを捕まえた者に褒美を取らす!!五剣の褒美じゃ！ちよつとした無茶くらいは叶えてやるぞ!』

「ハア!？」

『ちなみにわらわが勝ったら、自分へのご褒美として皆の一日をもらおうかのう』

その言葉に、一体何人が顔を青くしただろうか。

彼女が一日どんな滅茶苦茶なイベントを開くのか、考えただけで恐ろしい。

『さあ、転入生対学園生、盛大な追いかけっこ開幕じゃ!!』

「……うっそだろ?!」

その瞬間、あらゆる理由で彼を追いかける人数が増え、その本気度が上がった。

この放送主の声に恨み言を心中呟いた彼は、必死に走った。

白兔はひた走る

正直な話、慎の精神状態は五剣の予想以上にガタついていた。ただの一般人である慎にとって、武装しているだけでも恐怖の対象なのだ。

不良や暴力組織の中には、当たり前のように強い女性が居た。そのため、彼の中で性差による危険度の変動は実はない。

男女平等という意識が悪い意味で慎の脳裏にこびり付いていた。

この元女子高の女子たちにとって、男子というのは野蛮で傲慢でおっかない生き物なのかもしれない。だが、慎にとっては武装していたり武術をそれなり以上に出来る人間は、十分おっかない生き物なのだ。

詰まる所、そんな人間ばかりの空間で、そういう人間に追い掛け回されるという状況は慎の限界を徐々に消失させていった。

「このッ!! って、え?」

「へ?」

「あ、うえ? した? よこ???」

ドンツと地面を、壁を、天井を駆け回る慎。

縦横無尽という言葉をもそのまま体現しているその異常さに、女子生徒たちが全員目を剥いて驚愕した。

「まったく、しょうがないですわね」

そんな彼に立ち塞がれるのは、もはや天下五剣と呼ばれる程の実力を持つていないと不可能だ。

廊下を曲がった階段の踊り場、そこに立ち塞がるのは亀鶴城メアリ。

彼女は別に景品に興味はないし、同じ五剣の問題児が何か非常識なことをするつもりならば、それを実力を持って阻止するように動くだけだ。

ではなぜ彼の逃走を邪魔するのか。

理由は簡単で単純明快。

「天下五剣として、放置はできませんわ」

今は常識離れしてしまった治療力が働いているため動けるが、このままでは勝手に潰れてしまう。

天下五剣が預かると了承し、矯正共すると言いつ放ったのだ。

吐いた唾を呑むような趣味は彼女にはない。

それに何より、彼女は天下五剣として今日の前の問題を止めないという逃避を認めるわけにはいかなかった。

「ノブレス・オブリージユです。お相手して差し上げますわ」

そう言いつ構えるのはレイピア。

先端が尖っており、本来両刃のそれは非常に慎の恐怖心に引つかかった。

しかし背後には今まで避けてきた武装少女達がいる。

故に、慎はそのまま強硬突破を仕掛けた。

そして、その行動を慎はその後結構長く後悔することになる。

突き込まれた刃を、躲す。そしてそのまま斜め上へ——跳躍しようとして、強烈な痛みを感じ思わず下がった。

「痛っなんで!？」

「ジユタージユ………と言っても、貴方には分からないようですわね」

相手の肩口から背面を狙う剣技の一つ、それがジユタージユ。

簡単に言えば、剣先をしならせることで相手の意表を突いた攻撃となる。

「降参するまで、どんどん行きますわよ!」

「う、ぐうっ!？」

レイピアの連続刺突を躲そうとするが、その殆どがしなつて躲した後の崩れた姿勢を突いてくる。

しかも、その突き箇所は狙っているとか思えないほど、痛覚が認識しやすい場所ばかり。つまり、痛い上にその残滓が残る。

(この人の攻撃、痛い……——怖い!)

このまま穴だらけにされると感じ、事実銃弾で体に穴の空いた経験のある彼は、そうなった自分の姿と痛みを空想してしまう。

そうしてまた、彼のリミッターが一つ外れた。

「――」

ドドドドンツと鈍い音が校舎に響く。複数の轟音は、純粋な脚力によつて放たれたものだつた。

その威力は、足跡状にひび割れた面の壁が露わにしている。

(三角跳びに壁走り!? ニンジャのような移動手段ですわねつでも!)

亀鶴城メアリの刺突範囲は、スッポリと踊り場を覆っている。

どんな変則的な高速移動を試みたところで、彼女の攻撃範囲キリングゾーンから逃れられはしない。

「そこですわ!!」

勢い良く突き出されたレイピア。あり得ない移動術に虚を突かれたが、それを瞬時に立て直し、壁の破碎痕から飛び込んでくる場所を予測して見せた。

もう一度やれと言われたとしても、絶対出来はしない。亀鶴城メアリの集中力と観察眼、そして純粋な運が味方した瞬間だつた。

「」

それに対し、慎は何も反応を示さない。否、何も示せない。

枷が外れた彼の速度は既に人間のそれを超えている。走馬燈の様なゆつくりとした体感時間の中、彼が喋る暇などありはしない。恐怖の感覚と身体の反射に身を任せながら、薄れる沸起こる興奮危機感を利用して前へと進む。

「——え?」

行われたことに、亀鶴城メアリは呆然としてしまう。

確かに突いたはずのレイピアは、片手で白刃取り掴まれされ、そのまま直上へと投げられた。

投げられたレイピアは天井へと深く突き刺さり、柄部分しか見えていない。

だが、問題はそこではない。

「今、何が……?」

集中していた、運がよかつた、予測していた、予測場所は当たっていた。

なのに、気づけばその手からレイピアは失われていた。

彼女の五感五感は勿論、第六感と言われる純粋な勘ですら捉えることは

適わなかった。

最後の最後で圧倒され呆然とする彼女を置いて、慎はさらに加速する。

一人ポツンと残された月夜の懷から、機械音が鳴った。

目尻に溜まったソレを拭いながら、ゴソゴソと鳴っている物……携帯電話を取り出した。

盲目の彼女は携帯を扱えない。だが、携帯をワンプッシュして通話に出ることや、長押しすることで登録してもらった番号へかけることは可能なのだ。

ちなみに言うまでもなく操作したのは自分の従者であり、彼女の携帯電話にはその従者と自分の親族しか未だ登録されていないかつたりする。

「……もしもし」

「あ、もしもしお嬢？なんか学校が大変なことになってやがりますけど、大丈夫ですか？」

「ええ……だいじょうぶです」

さつきまで涙が零れないよう必死だったなどと言えるはずもなく、電話の相手……自分の従者であるエヴァに心中を誤魔化し伝える。

そして改めて精神を集中させ、校内へと耳を澄ました。

「……………前言撤回です、大丈夫じゃないかもしれませんが」

どうやら五剣のうち二人と戦ったらしい彼。

校内は既に彼の実力を五剣並みと判断したらしく、一般生徒は遠巻きに観察しているだけの様だ。

だが、自分を抜いた残る五剣二人はむしろやる気になっている。

——へえ、面白い子だなあ。ちよつと遊んでもらおうかな？

——ふむ、想像以上の盛り上がり様じゃ。さーて、賭けはどうなるかのお？

一言、しかしハッキリとその呟きを聞いた。

取り合えず学校を賭場にしている花酒蔵は後で止めるとして、それ以上の問題に耳を向けた。

「彼の身体が悲鳴を上げ始めています。未だ持つでしょうけど、早く止めなければいけません。エヴァ、手伝ってください」

「はい、承りましたよ。ちようどこっちの方が近いですんで、ちやちやっと思つてきますわ」

「今の彼は危険ですが、慎重にお願いします」

電話を切り、はあとため息を溢してしまふ。

彼の身体能力の高さ……というよりも、無茶のしやすさには驚かされる。まさか五剣を相手どつて未だ無事とは、信じられない。

彼は動きは素人そのもののはずだし、天下五剣の彼女たちはそれなりだと思つていた。

「……ガツカリです」

彼女たちなら止められる、そう思つていたが甘かつた。

止められない彼女たちにもそうだが、想定が緩すぎた自分に対しても彼女は気落ちしていた。

だが何時までもそうしてられない。

月夜は顔を上げると、急いで彼の元へと走つた。彼女は雲耀の速さに至れるが、実際長距離を走るとなるとそんなに短時間の記録にはならない。

こういう時、自分の幼さと病弱さが恨めしく思う。

もし、彼と同年……せめてあと2つは年が近ければ。もし、もうちよつとだけ身体が丈夫ならば、ずつと速く駆け付けられるのに。

「……もどかしいですね」

ガツカリという言葉にせず、改めて自分の胸の内を表現する。

もどかしいだけならばガツカリだけだったかもしれないが、それ以上の感情が胸の奥で燻っていた。

それをガツカリなんて言葉で纏めたくはなかつた。

(……もつと速く……はやく)

速く動け、進めと自分に命じる。

行き成りのことで彼を混乱させたのは分かっていた。彼の動揺の激しさにも問題があるが、自分に非があることも認めよう。

逃げられたことは凄く、すごく痛かつたけども、でもやつぱり落ち

着いたらやりたいたいことは一つだった。

——はやく、会いたい。

話したいことがある。聞かせたいことがある。聞きたいことがある。

番号の交換だってまだだ。初めてのお友達の彼を登録したくてたまらない。

会わなかった二年間。自分はこの二年を長く感じていた。会いたいの場所は遠くて、声を聞きたいのに連絡手段は無く、ずっとうずうずしていた。

もう二年間もどかしさを感じていたのだ。これ以上我慢なんて出来るはずもない。

彼が来ると聞いて、ずっと駆け出したくてたまらなかった。

ホームルームどころか、彼の住所を聞いてからずっと行きたくて仕方なかった。

でも堪えた。だって、自分から友達に会いに行くとき、何と言っていけばいいのか、どういう理由で赴けばいいのか、よく分からなかったから。

そして、五剣の報告という大義名分が出来た、というより勝ち取った。

自分で彼の矯正役になると立候補した。彼と一緒に居られる言い訳が出来た。

「ハッ、ハッ、ハッ……！」

そして彼をびつくりさせ、今の状況になって……ようやく、友達に会う理由が理解できた。

会いたいのだ、話したいのだ、一緒に居たいのだ。

こんな単純なことでもいいのだ、と。無意識のうちに理解できた月夜は止まらない。

呼吸が乱れるほど、息を切らせてただ只管に走るなんて初めての経験だった。

こうしている間にも彼の戦いは過ぎていく。

エヴァと対峙して、五剣の二人ともそれぞれに出会っている。

ああなんで自分が最後なんだとぶつけ先のない憤りも覚えながら、
彼女はただただ走った。

「え、因幡さん!？」

「ッ失礼、します」

いつもはクールビューティな彼女にしては珍しいどころか、初めての
姿に一般生徒たちが驚き、道を開ける。

頭の片隅で有難く思いながら、最短ルートに行く。

見かけが幼いからと言って、五剣である彼女を止める者などいな
い。

何事かと奇異の視線も感じながら、そんな要らない情報を無視し、
一直線に彼女は慎の元へと向かった。

そろそろ限界なんですか!?

身体に違和感を感じていた。関節が軋み、動くだけで痛みが奔る。呼吸が荒くなりながらも、どうにか人気の少ない屋上へとやってきた。

あの放送の時、全員が慎がいた校庭に向かったためだった。そして、その生徒たちも慎を自分たちの力で捕縛することは半ば諦めて居る。

「一息……つけ、そう……」

感覚もおかしくなっていた。此処まで来るのに、今の彼は数秒で辿り着いた。

しかし彼の体感時間はずっと鋭敏化されたままだったため、辿り着くのに数分は掛かったような錯覚を起こしていた。

(えっと、こういう時は鼻から深く吸って……はいて……落ち着いたら一定に……)

深呼吸をすることでその体感時間もどうか普通に近づいていく。

コレはある呼吸法の種類だと、自分の担当を受け持ってくれたお医者様遠山先生が教えてくれた。

これを極めればこの体質も段々掌握できるだろう、と言っていたのを思い出す。

コントロールとしてはまだまだ拙く、これもまた少し集中したり興奮すればスイッチが入るだろう。

(正直、面倒だとも思うけど……)

感覚が昂っていると、如何せん色々御座なりになりがちになる。

それはいけないことだと、先生は言った。その場その場に合わせた適当な呼吸をするだけでも身体に良いのだ、と。

——自分を大切にしなきゃ、ダメよ?

見かけ若々しい、というより幼い先生の言葉。

自分の状態とか結構どうでもいいと思うが、それでもあの心配そうな顔を思い出してしまふ。優しい美人というのは、狡い。あんな表情で言われてしまえば、大概の人は誰でも頷いてしまうのだから。

「ふう……ん？」

落ち着いてきたところで、校内放送が流れてきた。

放送の主はもちろん、ワラビンピックとやらを開催した五剣の人だ。

『新着情報じゃ！五剣二人を潜り抜けた転入生。いやはや大したものじゃのく。これはもしかすると、もしかするかもしれん！賭けを変えらるなら今のうちじゃぞく！』

「この声の人、人生楽しそうだなあ……」

というか天下五剣とかいう偉い立場の人が賭博とか良いんだろうか？

この声の主に感じていた怒りが何だか呆れに変わりはじめ、笑みを浮かべる程度に余裕が戻ってきた慎は、疑問符を浮かべながら呼吸を整える。

「……？」

休憩も束の間、階段を駆け上がってくる足音が聞こえた。

聴覚も視覚ほどではないが鋭くなっていたため、早めに聞き取れたそれに警戒する。

現れたのはメイド服を着た……因幡月夜の従者、エヴァさんだ。

「あれ？お嬢から聞いてたのより随分お元気そうじゃねえですか？」

「ふう。エヴァさん、お久しぶりです。どうしたんですか？」

エヴァと慎は知らない間柄ではない。

エヴァにとって主人の初めての友人であり、慎にとって盲目の友人の大事な人だという理解がある。

そして因幡月夜という共通点を持つが故に、挨拶ついでにちよつとの会話程度は交わす仲だった。

「ん？もしかして呼吸法？誰に教わったんで？」

「病院の先生ですよ」

「ほお、そりやいい先生に巡り合ったんですね」

流石というべきだろうか、ほんの少し観察されただけで呼吸法を知ったことを分かった。

まあこちらが呼吸法を隠したりせず、治療の一環として使っている

というのもあるだろうが。

「ああそれより用事を済ませちまいましたよか」

「用事？」

「ええ。それ以上の暴走は見過ごせねえんですよ。まあ呼吸法覚えたみたいで、聞いてたのよりいくらかマシみてえですけど、それ以上にお嬢の望みなんですね」

「……えっと、つまり？」

嫌な予感がして、収まり始めていた警戒心が急速に大きくなりだしていた。

エヴァは月夜の従者。月夜の従者が、弱いはずはない。

「つまり、ちよいと眠ってくだせえってことです」

「痛い眠らせ方はお断りです!!」

スカートから取り出された短い鎌を逆手に持ったエヴァ。

彼女の戦闘スタイルはよく知らないが、あの鎌……刃挽きされてる？されてるよね？

「あの、それ……それ刃挽きは？」

「ああ流石に女子寮管理人として刃挽きはしましたけど、まああんま関係ねえですね」

「でしようね！」

刃挽きされた刀どころか、模造刀で葉を斬る月夜の従者だ。

実力は天下五剣と同じか、下手をすればそれ以上だと考えていいだろう。

そんな人が、刃挽きされた刃を持っている——！

「——!!」

落ち着いていたタガが一気に外れ、世界が遅くなる。

ズンツとこちらが一步下がろうとしたところに、エヴァはそれ以上の速度で突進を仕掛けてきた。

人間は後ろに下がるより前へ走る方が速いのは当たり前のことだ。

逃げられない、逃げるにしてもこの人を掻い潜って後ろの扉から脱出しなければいけない。

意を決して、振るわれる鎌を避けることに集中する。

(……なるほど、これは厄介でやがりますね)

エヴァの振るう鎌は変幻自在であり、鎌特有の刃の反りを利用した、普通の刀とは違う軌道で斬れる特異性が強みの一つだ。

そしてそれを避ける彼の動体視力もそうだが、それ以上に身体の方が問題だった。

(貰った資料よりずっと速いじゃねえですか)

資料の更新は転入前、最後の診察のもの。だが彼の動きはそれ以上の速さになっていた。

人間の肉体は本来こんな急に、他人から見えてわかるほど変わったりはしない。

だが慎の身体は、急速に壊れながら回復している。

このサイクルによって、更に身体が頑丈になっていくのだ。

しかも、命の危機を感じとって行われる働きは彼の身体から無駄をそぎ落としている。

見かけは細いのに、彼の骨密度や筋肉質はかなり高くなっている。細く、しなやかで頑丈。

こんな身体をもし武術や剣術に使うと——恐らく、かなりの工程を省略した特殊かつ迅速で強靱な剣士拳が出来上がるだろう。

「末恐ろしい人でやがりますねえ!」

「恐ろしいのはどっちですか!?!それ、テカリ方からして何か塗ってるでしょ!」

「ああ気にしない気にしない」

「気にしますよ!!」

叫ぶ彼だが、エヴァは本当にこの薬に期待などしていなかった。

彼の代謝は普通ではなく、感覚も違っている。麻痺や睡眠の効果がちゃんと発揮されるか未知数なのだ。

下手な薬を使用すれば、彼のリミッターを壊しかねない事態に陥ってしまう。

(まあ薬品使いとして、何よりお嬢の従者としてそんな不測の事態は起こすつもりはない……けど)

本当に厄介だため息をつきたくなるエヴァ。

だが、従者である以上主人のオーダーには応えなければならない。焦らず慎重に、しかし迅速に追い詰めていくエヴァ。

戦闘経験では不良や暴力組織を潰した慎も相当だが、年季という点で言えばエヴァの方が分がある。

それに年下の相手は得意だ。こう見えてエヴァは五人兄弟の頂点なのだから。

「この」

「引っ掛かりやがりましたね」

慎が焦ってこちらの隙に手を伸ばしてくるが、それはフェイク。

ヒラリと躲すと、誘いに乗らされた慎を気絶させるため、体重のかった脚を蹴り体勢を崩し、打ち込もうとしたが……。

「ッ」

「んな無理やり!?!」

慎はそれに力技で対抗した。蹴ってきた脚を、逆に蹴り上げて見せたのだ。

本来なら勢いの乗った蹴りに対し、勢いゼロそれも重力に逆らって振り上げた蹴りが勝るはずはない。

だが、それを可能に出来るのが、彼の体質だった。

逆に体勢を崩され、急いで立て直すかもうそこに慎はいない。

「……マジっすか」

屋上から飛び降りた彼は、所々ある窓のふちなどのでっぱりや排水管を使って勢いを殺し、開いていた二階の窓へと飛び込んでいった。

追おうとしたところで、隣の中等部から、見知ったツインテールが走ってきている姿を遠目にだが、見かけた。

「……まあ、これもお嬢のためってね」

少し考え、エヴァは歩いて追いかけることにした。

無事エヴァから逃れた慎だが、未だ警戒心を解いてはいなかった。

そもそもエヴァを抜けて扉から逃げようとしていた慎が、急に飛び降りなどという危険行為に走った理由がある。

(何だあの人、何なのこの学校!?)

扉の付近で待ち伏せをしていた、どう見ても不審者覆面武装女子を目撃したため、慎は急遽扉以外からの逃走を図ったのだった。

そして降りるときに気づいた――2階以外全ての窓を同じ覆面をした女子たちが閉めきっていたのだ。しかも校舎を囲むように点々と覆面武装女子が配置されていた。

個性を潰すような同じ覆面に、こちらの動きを決定付けるための同タイミングの行動。生理的にゾツとした慎の警戒心は寧ろ急増していた。

（つていうか、あれってどう考えてもリーダーがいて、そのリーダーの命令で2階以外の窓を閉めてたよね？）

そう、これはどう考えても……誘導されている。

二階に人が見当たらないのは覆面武装女子によって人が排除されたからだろう。

そしてそんな大掛かりなことが出来るような人物は、天下五剣くらいなもの。

天下五剣が実力者であり、それを慕っているものがあるのは分かっているつもりだったが、こんな組織だった動きが出来るなんて予想外だ。

「取り合えず離脱しないと拙い……」

「どこにも逃げ場はないよ〜?」

「ッ」

どこか間延びした声に驚き振り返る。

そこにいたのは、翡翠色の長髪の女子高生。

美少女なのだが、その手に握っている刀が甘く見ることを許さない。

どうやら走り過ぎた教室から出てきたらしい。

「思ったより速いんだねえ。ちよつとタイミングずれちゃったよお〜」

「……………」

「あ、なんで後ずさるかな〜? 私まだ何もしてないよお?」

二パツと笑顔を浮かべる彼女だが、抜身の刀があるせいで全然和め

ない。

そして何より現状、この人があの覆面武装女子を動かしていたらう。何のつもりか知らないが、これ以上五剣とやり合うのは御免だ。

「ふーん……貴方、随分怖がりなんだねくくなっさけなーい」

「……」

随分安い挑発だ。不良たちとどっこいどっこいといった所か。

何せずと逃げ回っているのだから、そこくらいしか挑発できるポイントがないのだろう。

「それだけの力があるならもつと色々できるだろうに、なんでしないの？」

「……」

「アハハ、ダメかー。どうしよつかなあー。話のタネが流石にないな。ねえ、キミはさー」

無言を通してしていると、諦めたようにそっぽを向いた。

そのまま会話を続けている彼女だが、気にせず下がって逃げようとする。

——瞬間、刃がこちらに突き込まれた。

「ッ?!」

「おろろ？」

避けれたのは半分偶然だった。

視線を少しでも外した瞬間に大きく一步下がったのが幸いし、掠る程度に収まった。

だがこの人、そっぽ向いて斬りかかれるとは……初めての経験である。

(視線は別の方を向いてたけど、よそ見してたわけじゃない……視野が広いんだ)

視野の重要さはよく知っている。

本能的恐怖心による察知能力で回避するのが慎の得意分野だが、それ故に視界に入っている物への反応は過剰ともいえるほどだ。

防衛本能と恐怖心によって慎自身視野が広がっている自覚があり、そのおかげで何度命拾いしたか……これでプラス一回である。

だが、この人は慎以上の視野を持っている。

人間の視野限界は200度だと言われているが、恐らく限界いっぱいいっぱい、下手をすれば少しは超えているかもしれない。

「……貴女、天下五剣の人ですね」

「そうだよ。眠目たまばさとりっていうんだ」

「眠目さん、ですか。僕、戦うのとか好きじゃないんで、引いてもらえませんか？」

もし限界を超えているのであれば、この人は同類かもしれない、と少し思った慎。

そうじゃなくとも話しかけながら、殺気も闘気も出さずに斬りかかる精神。

少なくとも、自分同様何か大事なモノが外れている、そんな気がした。

「それはダメ〜」

「ですよ」

天下五剣と言われるのは、相応の実力があるからだ。

そしてその実力を知られているだけではなく、組織を率いている人は相応の誇示が必要である。

もしくは威圧、もしくは恐怖、もしくは——なんでもいい、舐められない理由というモノが求められる。

(ああどうしよう、ヤのつく人を思い出してしようがない……)

思い出しながら彼女の刃を対処する。

視線を気にしても無駄だとわかったため、警戒するのは刃そのもの。あとは彼女の体の動きだろう。

身体能力が異常な慎は必死に避ける。

眠目さとの『観の目』は流石という他ない。

人体の限界をこじ開けている慎の異常な動きを、見事察知して斬りかかってくる。出鱈目ならば、そういう風に見越して、彼女自身の動きにあり得ない緩急を加えているのだ。

そのありえなさが、滅茶苦茶な慎の動きに一致し、逃げる事が出来なくなっていた。

慎にとつて先に戦った三人の誰よりも、この目の前の少女が一番厄介だった。

「アハハ、凄いやつたらそんな動きになるのくく？」

「殆ど力技なので何とも……貴女こそ、やりにくいったらないですよ！」

時折危ない太刀筋があり、そういったものは無理やり蹴りはらつていく。

避け避け、蹴つてまた避ける。段々動きは通常のものから外れていき、壁や天井、床すれすれを沿うように――。

「アハハ、なにそれく？」

「……」

またもや無言になる慎だが、もう彼には喋る暇がない。

彼にとつて流れる時間は眠目さとりと同じではなくなっていたからだ。彼女が一言喋る間に、慎は十以上の思考を終わらせる。

今慎が彼女と喋ろうとしても、会話はずれていくばかりだろう。

それを知つてか知らずか、眠目さとりはおかしそうに……事実おかしく、笑った。

「動物、ううん、獣みたいだねく？それが貴方の戦闘スタイルなのかなあ？」

「……」

天井や壁、床を全部使うためには、二本の足では足りない。

慎は自然と両手を床に着けるなどして使うようになり、まるで四足動物のような動きへと変貌していった。

「ふふふ、どうしよこんなに予測外の動きは初めてだよおく！」

言いながら、それでもこちらを逃がさない剣筋はやはり異常。

彼女の観の目がどれだけ卓越したのもなのか、もはや数秒先の未来予知ともいえるかもしれない。

となると、これでは駄目だ。足りない、彼女から逃げるにはもう工夫必要になる。

——瞬光と言います。一瞬三斬と言って、抜き放つて合計三回斬り裂いてるんです。

足りないと感じた瞬間、思い出したのは一人の少女の言葉。何時だったか、あの剣閃の詳細を覚えてくれた時のことだ。

あの子は意外と人との触れ合いが大好きだ。中でもお喋りが好きらしく、色々話してくれた。

そう、瞬光は不可視の斬撃。それだけでも驚きなのに、彼女は——不可視の速度で動けるのだ。

——雲耀の説明は、少し難しいですけど……そうですね、簡単に言うとうと重心を体の外に持ってきて、それから——

説明している彼女の姿が脳裏を過る。

それが砕けている彼女の姿が脳裏を過る。見せる走馬燈それが砕けているって、いる身体が通告している合図だと自覚はしていたし、それをするよりも一層崩壊するとも感じていたが、慎はそれでもその言葉に従った。

「——」
二足での雲耀を四足で行うなど前代未聞だろう。

事実、きつともう一度やるにはまたギリギリの状態にならないと出来ないという自覚があった。

火事場の馬鹿力、限界を超えた再現力によって慎は一瞬不可視と化した。

「アハ、凄いねえ……見えなかったあ」

背後で崩れ落ちる眠目。

別に難しいことはしていない。鬼瓦輪の時同様、脳を揺らしたただけである。

違う点と言えば、あの時と違って威力が増している上、不可視の移動を用いた高速打撃だったということだろう。

眠目さとりは崩れ落ちたまま気絶した。それを確認し、先へ進む。

「……………ふう。さて、と」

今の攻防で腕がいかれ始めた慎だが、気にせず解すように肩を回す。解すどころか、ゴリゴリと異音の錯覚を感じるほど違和感が慎を襲った。

しかしやはり気にせず、その眼は踊り場付近にある一枚の紙きれにとまった。

それは高等部の見取り図。

貼ってあったのは偶然ではない。『ココだよ♪』という女の子らしい小さく丸い字で書かれた文字と矢印が、放送室を指していた。

(初めから負けるつもりだった、のかな、あの人?)

思えば最初に出てきたとき、問答無用で襲つてもよかつたのだ。

喋りながら斬りかかることを良しとするなら、それこそ不意打ちだっつていいだろう。

騒ぎを収めるという点で言えばそれで一発で仕留め、しかも報酬迄もらえるというのに。

(行動理由が全く分かんない……とも言えないなあ)

なんとなく、自分でもこうしたと憤は思った。

だつてそうだろう。此処まで大騒ぎにしておいて、その張本人が高みの見物何もしないなんて、癪ではないか。

特に眠目さどりの様な人を率いる方の人間が体よく扱われるなんて、プライドに触るはずだ。

まあ、もしかしたら慎を軽くノした後、報酬で何かするつもりだつたかもしれないが。

「先輩だか何だか知らないけど、一言文句言わないと」

誰の陰謀だろうと知ったことではない。

やりたいことをやる、それが稲津慎の本質であり、こんなところに転入してきた根本的理由である。

さしあたって今やりたいことと言えば、因幡月夜の言っていた内容の撤回と……騒ぎを極大化してくれた人へ、拳骨の一発でもくれてやりたかつた。

腕がいかれ始めてるから威力は大したことないだろうし、別にいいだろう……なんて考えている憤だが、いかれててもその威力は常人を逸しているという自覚はない。

「おっじゃましまーっすー!」

「な!」「ちよ」「キ!」

身体の痛みを必死に胡麻化そうとする脳内麻薬と、なんだかんだ強者と戦ってきた憤は割と上機嫌に放送室の扉を蹴り開いた。

なお、扉の前に三人ほど女子生徒がいたが、彼女たちは慎の存在を知覚したのは扉を蹴り開く瞬間だった。

武装少女の動体視力が追い付けない速力と、何より異常な移動手段。彼が今どれだけおかしい状態か、これだけでも察せるといふモノ。

そんな異常な彼が放送室に入る……そして、ポカンと呆けてしまった。

「お、もう来たのか。速かったのお」

「……………え？」

薄ら笑いを浮かべながら蹴り入ったというのに、そんな昂りも引つ込めてしまうほど驚いていた。

放送室にいたのは偉そうにふんぞり返っている金髪の少女……見かけ中学生ほどだが、着ているのは高等部のソレ。

そんな小柄な少女と……………——そのすぐ側に寄り添うように立っている熊だった。

「く、熊あ!？」

彼の限界突破リミットブレイクと医者に命名されたその異常性には、制限時間が存在する。

回復能力が異常な彼だからこそ、こんな長期で戦えているが、それでもこの連戦で大分疲れていた。

詰まる所、そろそろ限界なのだが……目の前にいる存在はまだまだ休ませてくれそうにはなかった。

そうして今はこの有様です

黒い毛皮、大きな四足に鋭い爪。

慎の目の前に、誰も見間違いないでであろう熊がいた。

しかも子熊ではなく、普通に大人の――。

(いや、なんで熊?ていうか熊?え、熊??)

目の前の現実を受け入れるのに数秒かかりつつも、どうにか呑み込み熊から金髪の少女へと視線を変えた。

視界から外すつもりはないが、どうしても熊が目に入って仕方がない……とても怖い。

「ええつと……いややつぱ気になる。その熊さんはなんですか?」

「ん?ああキョーボーのことか、なあに見ての通りわらわの相棒よ。気性は穏やかな子じゃから、安心せい!」

「は、はあ。そう、ですか?」

身体中の大きな傷跡とキョーボー狂暴としか聞こえない名前からして全然穏やかそうに見えないのだが……まあ、今のところ大人しく控えているだけなので、その言葉は一応信じておこう。

内心テンションに任せて突撃したことを非常に後悔しながら、それでも言っておきたかったことを伝える。

「悪いんですけど先輩、ワラビンピック、でしたっけ?取り止めてもらえませんか?」

「それは出来ん、と言いたいところじゃが」
「?」

答えは想像していたのと少しズレていた。

此処まで大騒ぎになったコレを簡単に終わらせるなんて却下されると思っていたのだが、見かけ少女の先輩は困ったようにこちらを見た。

「おぬしが意外と頑張ってくれたおかげで、もうこれ以上の盛り上がりは期待できそうにない。しかし、わらわ自身賭けておつての。引き下がるなど出来ん」

「トップが賭けつていいんですか……?」

「それが許されるのが天下五剣というものよ。さて、そこで提案じゃ
ザッと背後に気配を感じとる。

扉を蹴破る際に無視した三人と、同じ背格好の人が大勢部屋の外を
かこつていた。

その中にはカメラを回している人までいる。どうやら全員彼女の
配下の者のようだ。

「天下五剣、そのうち三人を破ったおぬし対、わらわと三獣士。最後の
賭けを行おうではないか」

「……これ、脅迫じゃないですか？」

「敵陣に真つすぐ突っ込んできたのはおぬしじゃよ。それで、どうす
る？」

「どうするって、受けるしかないでしょ」

こつちはもう限界だが、この人数全員と相手するより、彼女とその
三獣士とやらを相手する方がまだ勝率がある。

というか、三獣士ってなんだ、熊のほかにもいるのだろうか。虎と
か……いやいやいや。

「えつと、ちなみに三獣士っていうのは誰のことですか？」

「ん？ああ、おぬしは知らぬか。リーダーはこのわらわ、はなさか花酒蔵。そ
して三獣士とはまず、そこにいるとうこ東狐じやろ」

扇子を持った細目の金髪美人さん。どう見ても人間の美人さん。

虎じゃなかった、良かった。

「次にその隣の狸原」たぬきはら

黒髪ロングで瞳が大きい目の美人さん。こちらも人間で心底安心。

「で、キョーボーで三じゃ」

「あ、やっぱりキョーボー……先輩？は入るんですね」

「ハハ、キョーボーは生徒じゃないゆえ、先輩は敬称付けんでもよい。ん、
ではついてまいれ！流石にここで暴れるわけにはいかんからのお」

何だか嬉しそうな少女先輩についていく。

まあ放送機材やらなんやらがあるわけで、確かにここで暴れると怒
られるだけでは済まなそうだ。

「そうそう、扉の破損代はおぬしが払うようにの？」

「うげっ」

教訓として、時としてハイテンションに身を任せると面倒なことになる、と慎は学んだ。

追いついた月夜だったが、既に彼女の介在を許す状況ではなくなっていた。

校庭の中央に半径100mほどの丸い円が描かれ、その中央に三獣士と蕨、彼女たちの前には慎が立っている。

そして四人と一頭の邪魔をされないように囲っている蕨の配下たち。

(厄介なことになりました……)

月夜の実力ならこの程度の囲い、突破するなんてわけではない。

だがこれは既に決闘、試合である。いくら彼女が天下五剣であり強者だからと言って、他人の決闘に自分の口、もとい「武」を挟むのは矜持に反する。

(いえ、しかしもう彼は限界。これ以上は——)

「あれえ、どこいくのお？」

やはり無理にでも介入しよう、そう決めた月夜だったが、背後からの声に立ち止まる。

「……………もう起きたんですか、眠目さん」

「んん、まあまだフラフラするけどねえ〜」

「マコ君が優しくして、何より未熟で助かりましたね」

本来の雲耀の速力を攻撃にそのまま変えたとしたら、気絶では済まなかっただろう。

それもあんな滅茶苦茶な雲耀の攻撃ならば、骨は容易に砕いたはずだ。

まだまだ未熟で、速度で言えば瞬光の足元程度だろうが、攻撃力だけならば馬鹿力も合わさって……人などスプラッタに出来るだろう。

顎に掠らせるといふ温情と、雲耀を初めて使ったという未熟。この二つが合わさったおかげで、眠目さとりはこのタイミングで目覚められたと言ってもいい。

「それで、どうするのかなあ〜？まさか、あの中に割って入る気い〜？」

「……そうだとして、貴女にどういう関係が？」

「ん〜、ただちよつと、彼の底力に興味があるかなあ〜」

「既に底力なんて尽きかけてますよ」

武装生徒たちからの逃走、天下五剣との連戦、そして今この状況。肉体的にも精神的にも限界のはずである。今彼が立っていられるのは、脳内麻薬によってハイテンションが維持されているからだろう。

「ふふ、人ってねえホントに分かんないんだよ〜？」

「……彼を使つて未知を知りたい、と？」

「限界を超えられるんでしょ？きつとボクが出来ないようなことが起こるんじゃないかなあ〜——なあんてね？」

嘘か本当か、月夜でも動悸や体の動きからそれを判断することはできなかつた。

ただ、背後に立った彼女は言外に告げていた。

——邪魔をするな、と。

さあてどうしたものか、そう考えてもいい案は浮かばない。

慎にとつて今自分が動いているのが自身でも不思議でたまらないのだから。

身体中が痛いことから、何となくヤバい状態であるという曖昧なこゝとくらいしか分からない。

ただ言えることは一つ。

(多分、もう身体保たないぞコレ……)

問題は熊だ。あの巨体はいつたい何キロあるのだろうか？少なくとも300キロは難いだろう。

となると一番に狙うのは熊。そのほかは後回しということになる。

「さあて、それでは」

「グルル」

「つと、落ち着けキョーボー。スタートはまだじゃぞ」

人が集まったことと、ハイテンションが相まって若干やる気になっている慎に当てられたのか、熊さんが唸った。

それをポンポンと撫でているが、そんなので落ち着くわけが……。

「バウ……」

（すげえ、落ち着くんだ……!?!）

流石飼主ということだろうか。あんなに怖さを感じさせていた熊が、心なしかデフォルメ化している気がする。

今からアレと戦わなければいけないのか？

そんな疑問と戸惑いが浮かぶ程度には、普通に可愛らしい動物にか見えなくなっていた。

「それでは、改めてルール説明じゃ。なあに簡単なルールじゃよ、手負いのお主でも勝機があるようにしておいた」

「それは有り難いですけど、どんなルールですか？」

「この円枠の外に出るか、倒れたら負け。以上じゃ」

「ハハハ、そいつはお優しいことで……」

シンプルだがそれがどれだけ難しいか。

そもそもあの巨体の熊をどう倒せと？色々頭の中で考えるが、碌なアイディアは浮かばない。

（いや、もう考えんのやめよう……五体満足なんて無理そうだし）

思考、知恵というのは素晴らしい人間の武器だ。

だがそれは時に恐怖や躊躇を生み出し、身体の動きを阻害することがある。

3対1という状況の中、頭を回している時間は無いだろう。

直感的且つ反射的にこなさなければ、きつと負ける。

「あの娘が合図じゃ、よいな？」

髪型も顔つきも似たような女子生徒のうち、一人が旗を持っていった。

その旗を振り上げ、その後振り下ろしたらスタート、そういうことらしい。

「コココ、姫様の手を煩わせはしないわよおん」

「ん、さっきの不覚……汚名返上するぽん」

東狐と狸原の二人がやる気を上げて一步前へ出た。

さっきのことというのと、恐らく扉を蹴破られたことだろう。下級生、それも中学生にしてやられたことが、彼女たちにとっては汚名らしい。

「……………スウ」

旗が振り上げられるのと同時に、呼吸を意識する。

天下五剣との戦いで、何となく呼吸による切り替えが分かってきていた。

音はならないが、頭の中でカチツとスイッチが入るような感覚を起す。

全てがスローになり、旗が振り下ろされるまでがじれったくなる。

ドクンドクンと心臓の鼓動が煩い。殺気のような闘気が相手から感じられる。そのやる気が視線に乗せられ、目の前の三人と一頭が自分のどこを見ているかが予測できる。

(まだ……………未だ……………)

視界の端で振り下ろされる旗。

降り降ろされ切った瞬間が開始だ。

意外にも相手は律儀にルールを守るらしい。同じく視界の端に旗を収め、しっかりと振られるのを見ていた。

そして——降り降ろされた瞬間、スタートダッシュを切ったのは慎だ。

「コッ!？」

「ぽん!？」

先輩二人が駆け出そうと重心を前にしたその時には、慎はその身を深く沈ませ、二人の間にいた。

不可視とはいかないが、それでも人間としてはあり得ない速度。その理由は、単純な力任せである。

その証拠に彼がいた場所は砂煙が立ち昇っている。

そもそも二人は慎が熊を警戒して近寄ってこないと踏んでいたのだろう、直近された瞬間が隙だらけになっていた。

「すみませんッ!」

「ウグツ」

グイッと襟首を掴み、観客の居る枠外へと放り投げた。

先輩二人は観客である武装少女たちに受け止められるも、ルール上敗退だ。

「ハハ、近寄ってくるとはな！次はどうするつもりじゃ？逃げ場はないぞよ！」

「グオオオオオオオ!!」

元々円枠は広く作られていた。

恐らく、三獣士相手に逃げ回る慎を餌見物にしようとしたのだろうが、こんなボロボロの状態でそんなことに付き合うつもりはない。

そもそも熊相手に追いかけてどこできるなんてあり得ないのだが……それが出来るのが彼である。

「」

思考は捨てた。反射と勘のみで熊と人のコンビネーションを捌く。

二足歩行でボクサーの動きをしながら寄ってきた熊には多少驚いたが、ボクシングというなら彼は体験していた。

ヤクザや不良の中には、ボクサー崩れと世間一般で呼ばれる人種がいたからだ。

ボクサーのパンチと熊のパンチ、実はそこまで差がない。熊のパンチ力はプロボクサーとどっこいどっこいだとか。

だが問題はそこではなく、爪があるというのと、振り下ろしだ。

人の肉どころか骨すら断つであろう爪は勿論、二足歩行となったことで重さが十分乗せられる熊の振り下ろしも厄介だ。

何せ、常人ならば即ミンチである。

「ハ？」

故に、慎が行ったことを全員が目を疑った。

人と熊が左右を激しく交差させながら、熊の引つ掻きと人の刃が慎を襲った。

まさに人獣一体の攻撃に対し、慎の勘は避けきれないと判断。

行われた反射として、振り下ろされた爪を蹴り上げ、胴を狙って来た刀の側面を殴った。

熊の三百キロを超えるであろう体重が乗せられた振り下ろしと、花酒蔵特有の、円を描くようにして身体を捻った振り回しの全力一刀が見事止められた。

「グッ、ガアアアアアアアアアア!!!」

脚、腰、背骨、拳、腕、肩と衝撃が伝わり、全身がビキビキと異音を発したような気がしながらも、慎は止まらない。

目の前の熊が一瞬怯えるほどの咆哮を上げながら、蔵の腕を掴み、引き寄せ——そのまま熊にタックルした。

「お、お主——ぐエ?!」

「グオ?!」

溺愛しているのだろう相棒の熊を自分の刃で傷つけるわけにはいかない蔵は、一瞬武器の動かし方を思考する。

熊は信頼している相棒である蔵を傷つけるわけにはいかず、一瞬動きが膠着する。

勿論、その後両者が狙うのは速やかな慎の排除だろう。

おそらく約2秒後にはその身軽さを利用した彼女が抜け出すか、抑えられたまま攻撃してくる。

熊、キョーボーも同様に狙いを定め直し、改めて攻撃してくるだろう。

そして、今の慎にもう二度目は無い。

次同じ無茶を行えば、今度こそミンチ待ったなしだ。

「スウ、ンガアアアアアア!!!」

「あ、アババババ!!」

「?!?!」

故に行ったことはシンプルだった。

キョーボーごと花坂蔵を持ち……そして、そのまま回転した。

ちなみにこの時、彼女を下敷きにキョーボーを持ち上げる事も可能だったが、それをすると花酒蔵という少女が三百キロ以上の熊に潰されることになる。流石に自分の手で少女が文字通りプチッと潰れるのは避けたかった。

流石に上下に振られながら回転されるのは初体験なのだろう、彼女

もだが、何よりキョーボーが直ぐに目を回していた。

「そおーらあああ!!」

十分な遠心力を生み出した後、ポイーつと一頭と一人を投げ飛ばす。

今度は観客を越え砂塵の上へ、キョーボーが下敷きになるように投げた。

「ハア……ハア……もお、無理」

座り込む慎。もう彼には動く気力すら残っていなかった。

周囲は呆然とし、眠目さとりはケラケラ笑っていた。どうやら熊を振り回して放り投げるとは思っていなかったようだ。花酒蕨が目を回している様子もウケたようで、彼女の笑い声のみが暫く響いていた。

「ぐう、ええい、喧しいぞさとり姫!」

「アハハハ、いや、だってキョーボーちゃんと蕨ちゃんのそんな姿見られるなんて思わなかったよお」

「わらわとて、まさかキョーボーごと回されるとは、ーウプツ」

相当振り回したせいでどうやら酔っているらしく、気分悪そうにしている花酒蕨。

しかし、このワラビンピックを開催した当事者として、最後まで責任を通そうとしているようだ。

「えっと、これで優勝は僕、でいいんですよね? 願い聞いてくれますよね?」

「お、おう……なんじゃ必死よのお」

「もうこうなったら、天下五剣直々に訂正してもらうしかないですし。何より都合がいいんで」

慎の要望は勿論、月夜との件である。

矯正方法ならもつと他にあるだろう、そっちにしてくれないかと。

しかし、それは叶えられなかった。

「いや、それは無理じゃ」

「なんで!?!」

「兎姫直々の案じゃったからのお」

「うさ……ああ月夜ちゃー因幡さんか。天下五剣なら、一生徒の嘆願くらいなんともないんじゃない？」

「いや、兎姫が五剣だからな、それは本人に伝えんとなんとも」

「あ？」

「ん？」

「ここで、ようやく一つ誤解が解けることとなった。

「え、五剣？」

「うむ、兎姫は天下五剣じゃよ。帯刀しとるじゃろ？」

「いや、あの子は昔っからああでしたから……え、マジで？」

「マジじゃ。というか、そっちこそマジか？昔って兎姫は小学校からの飛び級じゃろ？」

両者ともに何者なんだあの娘は、と驚いているとそんな二人の間に噂の少女がやってきた。

「……あの、いいですか？」

「ん、おお噂をすればというやつじやの。どうした？」

「取り合えず——ほい」

「へ？」

気づけば首筋に冷たい感触。

見れば抜かれた刀が当てられていた。

「つて、え、なに?!なんで!？」

「今回のワラビンピックは、彼を捕まえた者に賞品を、でしたね？」

「あ、ああ……そう、じゃの」

さっきの決闘で終わらせる気満々だった花酒蔵だったが、どこか有無を言わさない様子の月夜に押され、思わずうなずいてしまう。

「では、これで私の優勝ですよね？」

「え？」

「ああ……いや、しかしの」

「私の勝ちで——いいですよね？」

「ア、ハイ」「クウウ……」

それともやりますか?という闘気が月夜から起こり、流石にもうそ

んな体力も気力もありませんと白旗を上げる二人とキョーボー。

皮肉なことに、この学園に来て始めて心を通わせた相手が、よりによってこの一人と一頭であった。

取り合えず怯えているキョーボーを二人でよしよしと撫でながら、月夜の用件を聞くことに。

「では、彼の外出許可が欲しいです」

「ま、まあそれくらいなら別に……良いかの、鬼姫！」

「ん、ちや、ちゃんと矯正してくれるなら自分は構わないが……」

天下五剣取締り役でもある五剣の一人、鬼瓦輪が外出許可証を所有している。

彼女の許可が無ければ、まずこの証明書一つ手に入らない。

彼に敗北したこともあるが、何より月夜の圧に負け、他の五剣も判子を押して渡す。

「……さて、フフ。行きましょうか」

「え？どこに？」

とても機嫌の良い笑顔を浮かべた月夜は、慎の手を取り立たせた。

「勿論まずは病院です。相当無理をしたんですから。直ぐにエヴァが車で来てくれます」

「え、あ、え？あ、ありがとうございます？」

「はい。それと終わったら男子寮ではなく、女子寮に来てくださいね？寮の隣に貴方用の住まいを用意してあるんですから」

「あ？？」

「言つたでしょう？貴方は私と衣食住を共にするんです。本当は寮内一緒がよかったです、流石に許可は降りませんでしたので、しばらくはテントで我慢してくださいね？」

それと、この許可証は私が管理します。お姉さ……理事長にかけあつて特別な許可もとるので、楽しみにしてくださいね？」

「え、あ……あれ？あれえええええ？？」

慎は心底首をひねった。

おかしい、自分はこの幼女から逃げたつもりだったのに、何で気づけば逃げ場が無くされているんだろうか？

——え？逃げ場が無くなったのは暴れた自業自得？いやいや、花酒先輩がワラビンピックとかおかしなこと言いだすからでしょ？え、わらわ悪くない？ふっざけんよまた回すぞっ……あ、キョーボーは回さないから、怯えないでよ……よしよし。

最終的にキョーボーを使って現実逃避し始めた慎。

その日は暴れた罰として病院食すら抜きにされたが、四六時中月夜とエヴァと一緒に居たため暇ではなくなっていた。

そうして一般人なら半年は入院が必要殆どな状態自壊だったのにもかかわらず、僅か一週間と数日で治してしまった彼は、改めて学園へ通うことになったのだ。

「…………あの騒ぎも、まだそんな時間経ってないんだよなあ」

「ふふ、噂をすればなんとやらですね。見てください、アレ」

今日も今日とて一緒に朝食を食べ、一緒に登校していた月夜が指さした場所は、校門。

そこには、見事修学旅行先のハワイで焼けてきた花酒先輩と、キョーボーがいた。

「あろーは！日本よ！共生学園よ！わらわが戻ってきたぞよ!!」

どうやら、また一騒動起きそうである。

「取り合えずお帰りなさい、花酒先輩、キョーボー」

「お疲れ様です」

「おお、二人とも息災よな！」

「ガウ」

「おーよしよしキョーボー……なんか先輩は焼けたけど、ちよつとキョーボーは遅しくなったような？ハワイで何してたんですか？」

「ん？一緒に泳いだり……まあ色々な」

「熊と海で戯れたんですね……」

「相変わらず非常識です」

小学校を飛び級した天才児で盲目抜刀剣士とかいう非常識の塊の幼女が何かを言っている気がした。

「今、何か失礼なことを考えませんでしたか？」

「きのせいきのせい」

「……まあいいです。ほら、行きますよ」

「うん。じゃ、先輩失礼しますね」

「うむー」

「ガウガウくく」

手を振るキョーボーを見て思った。

「……キョーボーって、たまにデフォルメ化するのはどういう原理何だろう」

「でふおるめが分かりませんが、まあ深く考えない方がいいですよ」

世の中には不思議な存在が多数存在する。この手を繋ぐ幼女を含めて……。

「やっぱり失礼なこと考えてますよね？ブツコロ案件ですか？」

「違う違うー！いくら何でも朝からブツコロされるようなこと考えるわけないでしょ!？」

女の子相手に頭を下げる姿は、見る人が見れば情けないと言われるかもしれない。

でも、この学園の生徒は皆口をそろえてこう言う。

——ああ、また手を繋いだままイチャイチャと……砂糖吐きそう。

なお、色々怖いため爆発しろとは言わない。ええ、言いませんとも。

お年頃なのです

修学旅行から帰ってきた花酒蔵は、さっそくやらかした。矯正を跳ね除ける納村不道に対し、ワラビンピックの開催を告げたのだ。

しかも彼への実力行使による矯正を失敗し、その後毎日の面倒を見ているような形になってしまっていた鬼瓦輪と亀鶴城メアリも巻き込んで見せた……らしい。

女子生徒の殆どが講堂から出る中、慎は外に出ていない。というか、出られないでいた。

「凄いね、同じ五剣も巻き込めるんだ？」

「ええ、五剣会議は票が同数になると年功序列で決まりますから。鬼瓦さんと亀鶴城さんは彼に付きつきりでしたし、私は貴方の面倒を見ないとなので」

「あー……つまり今の先輩を止められる人が居ないわけだ」

「そういうことです」

そう、慎の膝の上で告げるツインテ少女こと因幡月夜。

今日は全校集会であり、男子生徒は一番最前列のゴザの上で正座をして受けなければいけないのだが……慎は月夜命令で彼女の席で、月夜本人を膝に乗つけて集会を受けることになってしまっていた。

慎としては何が起こっているのか見てみたい気持ちがあるが、月夜は動こうとしないので彼にはどうしようもない。

月夜は聴覚で全部把握しているため、動かないでいいのだ。

(んー、視線にさらされないのは良いんだけどなあ)

この共生学園の男子生徒は、基本的に全員転入生だ。

そして元問題児達でもある。流石に中学生で大きな問題を起こす生徒は少ないのだろう。高等部には一クラス分ほどの男子生徒がいる中、中等部には慎含めて数人しかいないらしい。

「……………見に行きたいですか？」

「へ??」

「いえ、私は把握できていますが、貴方がどうしても気になるんです」

ら、外に出てもいいですよ……?」

そう言ってこちらを見上げる月夜。

背中はずつたりとこちらにくっ付けて来て、全身からもうちよつとこのままがいいという態度がありあり見て取れるのだが、彼女はこちらを氣遣つてくれた。

健気で可愛らしいなあといついで頭を撫でてしまう。彼女が何も言わないので、この行動を止める人も咎める人もおらず、既に癖となっていた。

「んーん、いいよ大丈夫。巻き込まれるのも面倒だし、もうちよつとゆっくりしていいかな」

「そうですね。そうですね、また変なことになるのは嫌ですよね」

語尾に音符マークが付きそうなほど上機嫌に何度も頷くと、さらに背中を押し付け、もつと撫でろと言わんばかりに頭を少し掌にうりうりと押し付けてくる。

はいはい、とその要望に応える。

(——ハッ……可愛らしい行動に思わず頬が緩んでしまうが、これは月夜ちゃんが可愛いからであって、決して小さい子にアレコレなことを考えているからでは決してなく、強いて言うなら妹を甘やかしているお兄ちゃんな気分と言いますか、いや勿論彼女は妹じゃない自分みたい一般的な人が本来こんな距離感であることなんて相当レアだしそもそもこの状況は役得ではなく矯正が目的であってだから、そうだからこれは健全、健全な行為と感情なんでセーフ、誰が何と言おうとセーフ!!!)

一体誰に言い訳をしているのかと聞かれると、自分にとしか言いようがないことを内心で長々考える慎。

しかし、それを思うまでの行為が全て無意識であり、なによりその思考が色々墓穴つてるのは言うまでもなかった。

「——聞けば二人してこともあろうに矯正対象とイチヤイチャ——と!風紀を乱すような行いをしとる——いか!」

外から聞こえる蔵先輩の放送を聞きながら、朝の時間が過ぎていく。ああ、平和だと嘯み締める彼を講堂の外の生徒たち全員が思わず

振り向いてしまう。

(((イチャイチャ……………あれもイチャイチャ……………イチャイチャって何なんだろう……………))))

日頃の鬼瓦と亀鶴城がイチャイチャならば、今も尚くっ付いているあの二人はいつたい何なんだろうと、全校生徒の9割が思わず思考してしまった。

そして講堂出入り口付近の者に至っては、吐糖したいほどに甘さを感じており、結果全員講堂から出て苦いものを買に行つたという。

ちなみに現在学内で一番売れている商品がコーヒーであることは、あの二人を除き、教職員含め周知の事実であることは蛇足だったりする。

ワラビンピックが開催されたお陰で、講堂から人が消えた。

今頃は全校生徒が中継を見るために、テレビのある校内のクラスへ移動していることだろう。

先生にとつては予定が狂わされる一日だろうが、天下五剣のやることなのでどうしようもない。彼らの教鞭の振り方がいいので、特に心配もしていないが。

(さて……………どうしましょう)

講堂で二人つきり、これはチャンスである。

(今日こそ、今日こそ——番号の交換を、します!!)

月夜の決意は固く、しかし行動に移すための勇気が足りない現状だった。

携帯は懐にあるし、ピタツとくっ付いている上二人きりの今がチャンス、なのだが……………この現状事態唐突だったため、緊張に負けてしまっていた。

(そもそも花酒さんも花酒さんです。昨日の今日でいきなり開催することはないじゃないですか、こんな急に、それも朝から二人きりになれるなんて思つてませんでしたし……………ああ、どうしましょう、どうしたらいいんでしょう?なんと切り出せばいいのですか!?)

座り心地も撫でられ心地もよく、寧ろずっとこうしていたい気持ち

もあるのも問題だろう。

今までふかふかな座椅子に座った経験があるはずなのに、そのどれよりも彼がいいと考えてしまう自分の思考をどうしても追い出せない。

色々緊張してしまっているのに、思わず頬が緩んで彼に背を預けてしまう。

(うう……いけません、番号の交換を……こう、かんを……)

彼の撫で方は日に日に上手くなっており、小学校時代と比べると此方を氣遣つてくれる気持ちが増したのか、かなり丁寧で優しい。

入院していた時は腕が上がらなかつたため、撫でることはできなかった。だからその分、思う存分味わおうという気持ちが無いわけでもない。

(……そういえば、もう一人で食事もできるのですよね……むう)

入院中彼の世話を月夜とエヴァの二人で行っていた。

流石に用を足すのは自力で行っていたが、それ以外は彼女たちが付きつきりだった。

特に月夜は彼に「あーん」をすることと、彼の身体を熱いタオルで拭くのが楽しかったため、ちよつと残念に思っていた。

(流石に校内であーんは……今度どこか食べに行きましようか。お風呂は……さ、流石に未だ私にはハードルが高いですっ)

次同じようなことをするには、邪魔するものがない中同じ食卓を囲み、一緒に湯に入るために背を洗うくらいしか彼女には思いつかなかつた。

前者はともかく、後者はなんだか氣恥ずかしさが勝っている。目が見えないにも関わらないこの天才幼女さまは、当たり前のように、何となく視線を感じとれてしまう。

そういった知識もちやんとある分、羞恥心は同い年以上にある。だからこそこういうことを考えてしまうのだが、まあ詰まる所、お年頃なのだ。

(そのためにも、まず第一歩として番号の交換ですっ)
ギョツと動機付けをして無理やり決心を固める。

月夜は呼吸法とは全く無関係な深呼吸をして、口を開いた。

「あ、あのつですな！」

「ん？どうかした？」

「その、ええと……」

緊張でうまく口が回らず、伝えるのに四苦八苦するが、慎は優しい口調で待ってくれた。

無論五剣であり、世話役でもある自分に逆らえないというのものもあるのだろうけど、それでも嬉しいという気持ち湧いてしまう。

それはともかくとして、懐にある携帯電話を握りしめ、彼に突き付けた。

「こ、これ、その」

「携帯電話？」

「は、はい……私は世話役ですし基本貴方の近くにいますし何より私の耳から貴方が逃れられることはありませんが、でも知っているると便利でしょうから、その、えと」

さつきとは真逆に口数が多く、喋りも早くなってしまった。

焦る自分を落ち着かせようとするが、如何せん密着している状態ではどうやっても彼を意識してしまい落ち着くなんてあり得ない。

さつきまでこの温もりがあればいいとか考えていたのに、こうなると離れなければ落ち着かないだろう。

しかし、月夜に離れるという選択肢はあり得なかった。

顔を羞恥心で真っ赤にしながら、無理やり言葉を続ける。

「番号を……交換、しましよ？」

「……………」

「……………だ、ダメですか？」

「え、あ、いや、大丈夫。うん、交換しよう。えっと、登録の仕方とか聞いている？何番に登録したらいいとか、あるよね？」

「はい、ちゃんと真ん中を開けておきました！」

番号の真ん中、詰まる所5番か8番辺り。携帯を持った時、彼女の指が一番届きやすい場所に彼の番号を登録しておく。

ちゃんと言えたことにウキウキする彼女は満面の笑みを浮かべ、番

号を交換した携帯を大事そうに仕舞い込んだ。

「……………」

「~~~~♪」

月夜は全く自覚していなかっただろうが、上目遣いで頬を染めた美少女というのは言わずもがな希少である。

しかもいつもはクールと言われる彼女がそれをするのは、攻撃力が高い。

緊張から解放されたことと、番号を交換して上機嫌になった彼女は気づいていなかったが、慎の顔は真っ赤である。

そして彼の心臓も動きを速めているが、同様にドキドキしていた月夜が気づくことはなかった。

その日の夜、上機嫌だった月夜はどうしようと頭を再度抱えていた。

コンコンというノック音に振り向き、扉を開けたメイドにガバっと継りついた。

「え、エヴァー!」

「はいはい、どうしたんですお嬢?」

「で、電話」

「はい?」

電話がどうしたのだろうと疑問符を浮かべるメイド。

昼休み辺りに見かけたときは、かなり上機嫌だったところを見かけているため、特に問題があったように思えないのだが……。

「なんと行って、彼に電話をかければいいのでしょうか!」

「……………あー、あー~~~~」

「エヴァ?何を唸っているのです?唸っていないで応えなさい!」

「あーはいはい。というかなんで電話何です?本人に言えばいいじゃないですか」

慎は女子寮の側のテントで暮らしている。

というか、ついさつきまで寮で一緒に食事をしていただろうに、何を言っているんだろうかこの小さなご主人様は。

「いえ、その、折角なので携帯で出かける日取りを決めようかなあ、と……思ったのですが」

「いざ電話をかけようとしたら、恥ずかしさと緊張で番号を押せない、と？」

「ま、まさしくその通りです。エヴァ、いつの間に読心術をつ!!」

「いやーもう何つつうか……ハア」

もう何を言っているのか分からなくなってきたエヴァ。

別に慎ならまだ起きているだろうし、食事も住んで今頃は備え付けのシャワーでも浴び終えている頃だろう。

電話するタイミングとしては間違っていない。というか、それを聞いていたからこそその判断だろうに、この幼女主人は行動に移せないでいるようだ。

(年頃の娘っていうか、乙女つつうか……面白、もとい可愛らしくなりやがりましたね〜)

目の前であたふたする月夜を見るのは、正直愉悦……もとい年頃で大変そうだと思う。

まあこの辺りは決心を固めてしまえばいいのだろう。羞恥心や緊張に負けない動機付け、というのが必要なのだこの主様は。

「今電話しないと、もうしばらくしたら寝ちまうんじゃないですかねえ?」

「そう、でしようね」

「話すことは決まってるんでしょ?」

「はい……」

「……そういえば、入院中は暇で退屈そうでしたよねえ。私らが相手してない時間が億劫だと言ってませんでしたっけ?」

「似たようなことは、言っていましたね」

「日頃学園に拘束されてますし、最近は良い子ですし? たまにはご褒美とか良いんじゃないですか?」

「そう、ですね。ご褒美、そう、ご褒美ですっ」

「んじゃ、私はそろそろ残りの仕事を片付けますんで、失礼しますね」
「はい……押すだけ、押し込むだけ」

ギョツと小さな拳を作ったのを見て、大丈夫だろうと部屋を後にする。

エヴァが立ち去った後、月夜は数分携帯と格闘した後、ようやく慎へかけることに成功した。

「もしもし、月夜?」

「は、はひーっも、もひもし!!」

耳元で彼の声が響き、思わず変な声が出てしまう。

電話ってこんなに気持ちがいいモノだったのだろうか? エヴァと通話していた時はこんな感覚感じなかったのに、と思わぬ衝撃に驚き声が上がってしまう。

「えっとう・月夜、どうかした?」

「ええと、ですな……その」

いけないと感じた。通話こは予想外に月夜にクリーンヒットしてしまった。

頭が真っ白になりかけながら、必死に言葉を紡ぐ。

ちよつと慣れれば上ずることはないが、やっぱり心地良いことに変わりはない。

座り心地といい撫でられ心地といい、彼は何でこうも一々凄まじいんだつと何やら訳の分からなくなりかけている月夜。

言っておくが別に慎は高級クッションに勝るようなふわふわした体ではないし、どこそのマッサージ機のような性能はしていない。

只いうならば、月夜が彼に対しそういう風を感じ取っただけであり、彼が凄いわけではないのだが、まあ蛇足であろう。

「つ、次の休みの日、どこかに出かけませんか?」

「へ?」

「あ、貴方も日頃大変そうですし、私とエヴァが一緒ではありますが、拘束感とか諸々から幾ばくか解放されると思いますよ?」

「えつと……いいの?」

「はい、全然大丈夫です!」

「じゃあ、んつと、よろしくお願いします?」

「承りましたっ」

一体何の会話なのだろう、事務的な会話ではないのだがなぜか妙な受け取り方をしてしまった。

月夜自身が妙なテンションだからだという自覚はあるが、自覚しても落ち着けるものではない。

「……………」

「んと……………」

「はう……………」

「……………」

暫く謎の無言が続くが、彼の吐息と声で結構一杯いっぱい月の夜。妙な声が出たため抑えた。彼に変な勘違いをさせてないか心配になる。

(いつもは、いつもはこんなんじゃないんですよ!?)

そう叫びたいが、それを言うとなんだかもつと可笑しいことになりそうで口から出さないようにキュツと閉める。

最終的に無言に耐えられなくなった慎が続きになるようなことを探し、切り出した。

「い、何時頃出掛けようか?」

「そ、そうですね。朝食は一緒に食べましょうか」

「その後私服に着替えて、寮前で待ってればいいのかな?」

「はい、そう、ですね……………」

(私服、私服?えっと、い、いつものでいいのでしょうか……………あとでエヴァに訊かないといけませんね……………)

外見の変化は月夜にとって分からないことの一つである。

何となくこういうのを着ているのだろう、というのは布のこすれる音で察せられるのだが、自分が着るとなるとピンとこない。

特に色と呼ばれる概念は全く、想像すらつかないためコーデイネー トはエヴァ任せとなっている。

エヴァを信頼しているため、気にしていなかったことなのだが……………一緒に出掛けるとなると、妙に意識してしまう。相手に変な格好と思われないだろうか、なんて不安がよぎるのだ。

「……………ふんっ!」

「?ど、どうかしましたか?」

「あーいや、なんか今日は月夜の珍しい行動をお目に掛かれて楽しいなあって」

「ムツ、面白がられるのは心外です」

「悪い意味じゃないよ?」

「分かってます。分かってますが、むう……」

今日一日、甘えたり緊張したり嬉しがったり、コロコロと態度が変わっていた自覚はある。

それを楽し気に見られているというのもわかつてはいたが、実際言われると、なんというか……釈然としない。

「何だか、狡いですね」

「何が?」

「私ばかり緊張している気がします。不公平です」

「って言われてもなあ。これでも結構緊張してるんだよ、こっちも」

「それも、分かってはいますけど……でも、なんかそっちの方が落ち着いてて、ずるいです」

電話するという行為に月夜より慣れているのだろう。

彼の性格からして、少なくとも電話する友達の一人や二人はいるだろうし、こういう約束もしたことがあるのかもかもしれない。

(……もしかしたら、女の子と出掛けたことも……むう)

もやっとする謎の感情を抱えつつ、会話を続ける。

「他に電話する友人がいる差でしょうか、慣れを感じてずるいです」

「それズルに入るの? いや、まあ慣れちやいるけど」

「……友達、ですか?」

「まあそりゃ」

「……女の子でしょうか」

なんとなく、声色が変化したのを自覚する。

怒っているつもりはないのだが、何故かニュアンス的にそんな風に口から出てしまった。

「いや、女子と番号交換とかしたことないって」

「そう、なんですか?」

「そーだよ。っていうか知ってるでしょ？こちとら一年で問題起こしたんだから、友達だつて一人くらいしか出来なかったよ。そいつ男だし」

「そうですか……では、私が初の女友達、なんですね」

「そーですよー」

「ふふっ」

彼には悪いが、思わず嬉しい声が漏れてしまう。

きつとその友人一人の為に無茶をしたのだろうという想像も、その一人しか残らなかつたのだらうという結果もわかっているし、その残酷なことを嬉しく思うのは不謹慎なのだろうが……抑えられなかつた。

「なんだよ、ボツチで悪かつたな」

「ボツチじゃないですよ？今は私が一番近い友達です」

「はいはい、そんなの知ってるよ」

「♪」

知ってるよ、過去形のそれはつまりこうなる前から友人認定されていたということ。近いというのが場所なのかそれとも距離感なのか、無論その両方だろうという自負。

自分と会う小学校時代はよく分からないが、少なくともその友人よりも自分の方が速く友達だったのだ、という浅ましい優越感。

イケナイことだと思いつながら、それはどうにも抑えられない。

その後も他愛のない会話を、一時間近く続けてしまった。

その時の彼女を他の人が見れば、年齢相応の少女としか見れなかつただろう。

それほどに、彼女は浮かれていた。それほどまでに、彼女が自分の感情をコントロールできていない、という証明でもあった。

取り合えず、一応成り行きが心配になって扉の前まで来てみたエヴァが砂糖を吐きそうになったのは、言うまでもない。

二人の関係は……

その日はいつも通り、テントまで月夜が起こしにやってきた。

朝食を手渡しで受け取り、一緒に他愛ない話をしながら有り難い
ただく。

そして一旦別れ、それぞれ着替えて女子寮前で待ち合わせる。

「♪」

そう、今日は月夜と慎がそろって出かける日。

魔物と畏れられる子兔が気に入り、歌を口ずさんでしまっているその浮かれ具合は、寮の生徒たちが思わずガン見してしまうほどである。

——あれは誰だ？天下五剣の魔物？え？ゑ？？

そんな視線を無視し、いつもと違った服装を纏った月夜は嬉しさ半分緊張半分で集合場所へと赴く。

傍らには相変わらずメイド姿のエヴァが付き従っているが、月夜は彼女自身の要望によりいつもと印象が違うものになっていた。

なるべく大人っぽいのがいいです、ということに従者エヴァはかなりの頭を悩ませた。

大人っぽいというが、そもそも彼女は文字通り子供である。故にあまり攻め過ぎると「背伸びした子供」になってしまう。

程々に、しかし確かな変化が必要とされた。

「……………え、エヴァ、おかしくありませんか？」

「はいはい、それ何回目ですかお嬢？似合ってるって言うてるでしょ、大丈夫ですって」

「で、ですか……………いえ、しかしですね」

「だー、もうこれ以上は余計なんですって。ほら、行きますよー」
「ううう」

段々緊張が勝っていき、既に十回目を迎える質問を繰り返す。

緊張している理由の一つとして、いつも持っている模擬刀を持っていないというのも大きいだろう。

今日の月夜は遊ぶためにお出かけするのであり、物騒なものはエ

ヴァがお預かりすることとなったのだ。

代わりに持っているのは真つ白な杖。所々に桃色のデザインが施されており、可愛らしい仕上がりになっている。

「お、おまたせ、しました……」

「ん、いやそんなに待っては……」

「……………」

寮の出入り口を振り返った慎が言葉を失った。

彼としては、いつも通りの巫女服にツインテール、模擬刀という個性感あふれる姿を想像していた。

故に、今の彼女の格好は想像から大外れのものになった。

「へ、変でしょうか？」

何時も持っている模擬刀ではなく、可愛らしい杖は彼の奥底に根付いた恐怖感や危機感を失くし、落ち着いて月夜を観察することが出来た。

月夜は不安そうにしているが、純白のレースが付いたワンピースは彼女に酷く似合っている。ワンピースというのにも色々種類があるのは知っているが、レースがあしらわれ、少しふわっとしたワンピースは可愛らしく、同時に彼女の持ち前の儂さを前面に押し出しており、非常に似合っている。

少し低めに纏めた何時もとは違うローツインテールは子供っぽさが薄れ、大人とまではいかないものの彼女が少女だということを意識させた。

そして鍰の広い白い帽子もローツインと合っている。少し身長が高く思うのは、ヒールを履いているのだろう。目線が高くなり、顔が近くなっただけで彼女の整った顔がよく見れるが、帽子でたまに表情が隠れ、それがどこかこちらの想像を掻き立てる要因となっていた。

「エヴァに頼んだのですが……」

「え、あ、うん。凄い、可愛い、よっ……」

「そ、そうですか……ふふ」

正直、慎は今の月夜をどう表現すればいいのか分からなかった。確かに可愛らしい、しかしそれだけではない。今まで幼女扱いして

いた自分は何だったんだと思うほど、彼女を近くに感じていた。

嬉しそうに笑う彼女。その表情をもつとよく見たくて近くに寄る。瞳は合っても彼女と視線を同じにすることはない——でも、視線を合わせるというのは、勝手ながらに一体感を覚えてしまう。

珍しい姿というのもあり、思わずマジマジと見る慎と、彼の視線を嬉しく感じる月夜。

「ゴホン」

「！」

数分経ったところでエヴァの咳払いが入り、二人とも我に返った。いや、別に我を忘れているつもりはなかったのだが、完全に意識から抜け落ちていた。

目の前で見つめ合う二人をどうしようか、寧ろ放っておいていいんじゃないだろうかと悩んだエヴァだったが、メイドとして主の目的を果たすことを優先したのだ。

「その辺にして、そろそろ出発しませんかい？」

「そ、そうですね。行きましょう」

「う、うん」

「んじゃ、行きましょうか」

揃って校門から外へ赴く三人。

本来は天下五剣が二人居ないと外に出られないのだが、月夜が我儘を通した結果、彼女の従者が一緒なら外に出てもいいことになっている。

特例中の特例と言っているだろう。

その我儘の代償は、月夜というよりも慎が払うことになるのだがそれはまた別の話。

「そういえば、どこに行くの？」

「取り合えず街ですね。あそこなら色々ある、と聞いています」

月夜も実はこうして外に出歩くことは少ない。

入院生活が多かったうえに、私生活の殆どを修練に明け暮れていたから仕方がないともいう。

バスに乗り、暫く揺られ、そして——。

「はい、これ」

「え？」

唐突にエヴァから紙を渡された慎。

紙には注意事項と赤い文字で書かれ、月夜に関することが羅列されていた。

日が照っている場所には留まらず、出来るだけ日陰、出来れば涼しい、しかし寒すぎない場所を選ぶこと。

値段はどうでもいいが、あまり量を食べさせないこと。

刀を持っていないとはいえ、彼女の実力は一般人から逸脱しているため、何かあったら慎が対処すること。

等々エトセトラ。

なにこれ、とエヴァを見つめる慎。

「これから自分は少し離れて行動しますんで、お嬢の面倒を代わりに見てもらわないといけないんすよ」

「え、なんでです？」

「そりゃあお嬢のためですから。……何より近くに居たら砂糖吐きそうで」

「??」

砂糖を吐く？

よく分からない言葉に首をかしげる二人。

まあ月夜のことを想つての行動なら仕方がない、慎には拒否権がないし月夜は拒否する理由が特になかった。

「ああそれとはぐれないように手を握っておいてくださいよ？お嬢が足音で聞き分けが出来るのは分かっていますけど、坊ちゃんはそのじやないんですから」

「え、て、手を？」

「……嫌ですか？」

なんでこの少女は嬉しそうに手を伸ばしているのだろうか、というのは野暮だ。

先の通り、慎に拒否権はない。何より、嬉しそうな彼女を落ち込ませる訳にはいかないだろう。

また泣かせたりしたら、今度こそ学校中の生徒にボコられてしま
う。

「嫌じゃない、嫌じゃないよ」

「んっ」

失礼します、と手を繋ぐと月夜が心底嬉しそうに微笑んだ。

エヴァはごちそーさまデスと一言告げて、少し離れた場所でお店を
物色し始めた。

端から見ると一人で買い物しているように見えるが、こちらが動く
と一定距離以上は離れないように付いてきた。

「……なるほど、こういう」

「あまり気にしない方がいいですよ。それにしても、街というのは沢
山人が居るんですね……」

「あー、もしかして五月蠅い?」

「少し」

耳が良い彼女は自分の声だって他の人と違ったように聞こえてい
る。

静かな口調でクールなイメージが強いのは、自分の声で自分の耳を
傷めないように加減して喋っているというのもあるだろう。

「んー、どこ行こうか」

「どこでもいいですよ」

どこでも、というが月夜は目が見えない。それに耳が良過ぎるた
め、映画館に連れていったら彼女には衝撃が強すぎるだろう。

慎は月夜でも楽しめそうな場所を考えていくが、元々慎のための外
出なのを忘れてしまっている。

彼は自然と彼女と楽しめる場所を探していた。

「んじや、まずはベタにカラオケでもいいこうか」

「からおけ、ですか」

「そ、歌を歌う場所」

「む、知識ではちゃんと知っていますよ。行くのは、初めてですが」
「僕も久しぶりだなあ」

カラオケなら防音のため周りの音を気にしなくていいし、音量も自

分たちで調整できる。

冷暖房完備で座れるし、詞を覚えていれば画面が見えずとも歌える。

何より、ヒールに慣れていない月夜を少し休ませてあげたかった彼は、ゆつくりとカラオケの場所まで案内した。

「いらっしやいませー、お二人ですか？」

「えっと、はい。二人です」

「畏まりました。ただいまカップル割のキャンペーン中ですが、どうなされますか？」

「か、カップルツ!？」

店員さんにカップル割を勧められ顔を赤くさせたりもしながら、どうにかこうにかカラオケを堪能する二人。

聞き分けがうまい月夜らしく、やはり音程も完璧だったり、二人でデュエットしたりして健全に楽しむ二人と……。

「オレの歌を聴けええええええ!!」

ストレスを発散するが如く一人!つきりの個室でメイドさんが歌いまくっていた。

次に二人が訪れたのはお高いレストラン、ではなくよく在るバーガーのチェーン店。

自分のメイドが作ったことはあるが、こういう一般のは食べたことが無いという月夜の興味によってえらばれた結果である。

「これが、ハンバーガーですか……」

「そうそう。袋を使って手を汚さないように持って、かぶりつく」

「か、かぶりつく……はむ」

意を決して一口食べた月夜。

本人は大きく口を開けたつもりなのだろうが、如何せん元が小さすぎてかぶりつくというより、かぶつと齧ったような感じになってしまっている。

意外とウケたようで、ちよつとずつ食べていく様子は正しく兔さん……。

「美味しい?」

「はい、単純ながらも万人に好かれるだけありますね」

「そいつは良かった……ああほら、タレが手と頬についちやってるよ?」

「んっ」

手拭きをとり、小さな月夜の掌と頬に付いたタレを拭っていく。

こんなか弱そうな手で、あんな刀捌きが出来ているのかと思わず感心してしまう。

対する月夜は大きな男の子の手を感じ、何故だか気恥ずかしくなっ
てしまっていた。

拭われるという子供っぽいことをされたからかとも思ったが、優しい手つきは子供を甘やかすというよりも、繊細で壊れやすいものを扱うような、丁寧さを感じた。

「……何だか、マコ君が紳士です」

「へ?」

「いえ、何でもありません」

いつも紳士なつもりで慎が疑問符を浮かべるが、詳しいことは教えてあげない。

そのいつもと違う雰囲気を実感していない辺り、やはり鈍感だと思
う。

「矯正の道は険しく長そうですね……」

「え、なんで矯正??」

「ふふ、内緒です」

この日、この二人が居る時間にコーヒーを頼んだ人が大勢いたらしいが、関連性は謎である。

取り合えず、三杯頼んだメイドさんはご苦労様である。

その日最後に訪れたのは、海だった。

時期が少し早いということもあり、人はまばらで静かに繰り返して
いる波の音がよく聞こえる。

「果てない大きく静かな音と、不思議な匂い……これが、海ですか」

「流石に未だ冷たいと思うから、入れないけど。ゆっくりするには丁度いいでしょ?」

「はい……細かい砂、何だかくすぐったいですね」

「これが全部貝殻なんだから、凄いやねえ」

二人で隣に座り合い、のんびりとした時間を過ごす。

気付けば体力の少ない月夜は、慎に抱き着くようにして眠ってしまっていた。

「……………」

段々日が落ちていく中、綺麗な夕日ではなく紅い日に照らされる目の前の少女へと視線はくぎ付けになっていた。

正直、慎は月夜にここまで好かれる理由が分かっていない。

彼としては普通に話しかけ、特技を見せてもらい、友達になったとはいえ卒業後は音信不通だった。

普通なら繋がりは薄れるだろうが、なぜか再開した彼女は友好度が振り切っていた。

「……………」

小さな頭を優しく撫でる。

この関係性が何なのか、それだけはちよつとわかっている。

己の周囲に友達が少ない彼女と、友と自分の為に周りの人間からの評価を陥れた彼。

数少ない友人の為ならば何でもしそうな彼女と、友だと認めた者に過敏に反応する彼。

他にも細々したパーツが嵌って出来た、そう、これは——きっと依存だ。

「まいったなあ」

そしてそれだけではない、というのも薄々感づいていた。

変なレツテルがーとか、年齢差がーとか、色々あつた言い訳が崩れ始めているのを感じる。

理由はともあれ、ここまで想われて何も思わない奴はいないだろう。慎もその例に含まれていた。

何ならこのまま時間が止まったとして、彼は喜ぶだけという自覚が

あるほどに。

——同時に、躊躇が理性として働く。

彼女が自分を高く評価しすぎている、ということも感じていた。雲耀の才能がとか、抜刀術を直々に教えるとか、この異常な特技も相まって慎自身を過大評価されている。

彼はあくまで不良やあつちの道の人にイラついた、ただの不良だ。優しい友人がボロボロになって、それを受け入れるしかないという現状が気に入らなかった。

それを彼の友人は優しさだと断じたが、優しさを暴力という形で表現した時点で彼はどうしようもない不良なのだ。

——もう少しでいいから、僕にガツカリしてください。

ヘタレと言われようが何と言われようが、そう思わずにはいられなかった。

何かは盲目とはよく言うが、慎の隣の少女は文字通りの天才である。

情報から予測し、正解を探し理解を深める彼女が、文字通り特別視している彼を読み違えることなどない。

多少ファイルターが掛かっているのは認めるが、不良だというのも理解している。

しかしだからこそ、彼なのだ。

周りの人に認められなくとも、周りに流されず自分を通していた彼。

そんな彼じゃなければ、きつと自分に話しかけることもなかっただろう。周りに合わせて、周りに流されるような人だったら、自分と出会っていない。

別に合わせたり流されたりすることが悪いことではない。でも、そうしなかったからこそ今の関係に辿り着いたのだ。

因幡月夜は今の関係が好きで、これからも近くに居たいと思っている。

その今とこれから繋がっている道筋過去を否定するつもりはない。

不良でいい、問題児でいい、矯正したっていい、彼が彼であるなら何でもいい。

——この人が、いい。

小さな体に暖かな想いを育む彼女は、温かな感覚を覚えて目を開く。

遅くなったから帰るのだろう、彼は月夜を背負って帰路についていた。

ゆっくり歩く彼が■くつおしくて、大好きで、ギュツと大きな背中に抱き着いて……幸せな気分のまま、彼女は眠りについた。

何してるんです？

二人所一緒謂に出テかけた次トの日、いつも通り女子寮の前で月夜を待っていた慎。

しかし待ち人はいつもの時間には来ず、代わりにメイド服を着た寮長であるエヴァが現れた。

いつも月夜をエスコートしているエヴァだが、今日はその彼女がいない代わりに小さな包みを持って現れた。

「えっと、おはようございます」

「おーおはよーさん。悪いんだけどお嬢が風邪引いちまってなあ、一人で登校しやがってくださいいな」

「え……」

思い当たる節があつた。最後に立ち寄った海辺、水に触れていないが海風にあたりながら眠つたのは流石にまずかつたようだ。

慎の表情が陰つたのを見て、エヴァはポンつと彼の頭に手を置いた。

「……エヴァさん？」

「お嬢の病弱さは今に始まつたことじゃないし、あの程度なら大丈夫だって判断したのは私だし、あんま気にすんな。お前さんが落ち込んだなんて知つたら、お嬢がガツカリするだろ？」

急なことに戸惑っている間にパパつと言いたいことだけ言つて寮へと戻つていった。

弁当片手にポツンと残つた慎は学校へ向かわないと、そう思いながら視線は寮へと固定されていた。

「……行くか」

偶には一人での登校も乙なモノだろう。

いや、寧ろ本来矯正するために通わされているのだから一人が当たり前のはずだ。

そう思つて校舎に脚を向け歩き出したのだが……如何せん隣にいつもいるはずの少女のことが脳裏から離れなかつた。

(風邪……熱出てんだろうなあ。咳とかしてんのかな………苦しい、

よな)

慎にとって月夜は強者だ。これは、学校で畏れられている魔物という意味ではない。

身体が弱いにもかかわらず剣術を極め、望んだことを叶えるために努力を惜しまない。

時に子供らしい一面を見せることもあるが、寧ろそっちの方が年相応で素に近いのだろう。

だがそう考えると、友人を望む彼女は基本寂しがり屋であり、か弱い少女という面も確かにあるということだ。

「……………」

先日出掛けた時の月夜を思い出す。

彼女の可愛らしい姿と素直な反応、その身は小さくも確かに女性なのだと分かる一日だった。

剣術の關係ない月夜が、どんな女の子なのかというのがこれでもかという程に記憶に染み付いている。

きつと日頃から帯刀しているのもあり、強いギャップを感じただけのかもしれないが……それでも、やはり――。

「……………」

気づけば慎は転進し寮へと走りだしていた。

月夜にとって風邪は友人のようなものである。

昔からちよつとしたきつかけで不調になり、入院沙汰になることなんて当たり前だった。

でも、今この時だけは自分が病弱なのが本当に嫌になっていた。

(マコ、くん……)

今日もお弁当を作って手渡しをしたかった。

出来ることなら昨日みたいの手を繋いで登校してみたかった。昨日の今日ならばドキドキしてもきつと出来ると思っただのに……いや、無理かもしれない。想像しただけで風邪と關係なく頬に血が集まる

のを感じた。

この様では、もしかしたら碌に会話できなかつた可能性も……。

(……………)

人は思考にもエネルギーを使う。悶々と今日できなかつたことと、昨日の出来事を振り返っては熱を高めていた彼女の意識は薄れていった。

そして次に目が覚めたのは数時間後、ちょうどお昼時。

起きた理由は部屋に入ってきた複数の足音と、彼女の小さなお腹が空腹を訴えていたからだろう。

風邪を引いたその日のお腹がすくときは、大抵治りが速い。これはこれまでの経験からの予測だった。

さて、部屋に入ってきた人物が持つてきた、温かなで良い匂いのお粥を食べるために身を起こそうとして――。

「え？……マコ、くん？」

「へ!?なんで、ア、そっか足音かあ」

部屋に入ってきたのはメイドであるエヴァと……慎だった。

月夜が彼の足音を、というより彼から発せられる音を聞き間違えるはずはない。

しかし、今日は平日……学校から聞こえる音からして、時間としては昼休みのはずでは？

「なに、してるんですか？」

「あー……いや、そのお」

「……ハア。すいませんねお嬢。坊ちゃんがどうしてもお嬢の看病をしたいつて譲らないもんで、私が近くに居ることを条件にOKしたんすよ」

「私の、看病を？」

理由を話そうとしない慎の代わりにエヴァが説明するも、よく状況が分かっていないのか月夜はぼんやりと聞き返した。

未だ熱が引いていないのも理由だろうが、ゆっくり状況を把握すると……月夜の顔の赤みが増した。

彼女は彼を矯正しなくてはいけない。故に、これは怒らないといけ

ない。だが、そんな当たり前のことが出来なかった。

——だって、彼が自分の為に学校を休んで看病してくれる。この現実が嬉しくて堪らないのだ。

他の生徒たちが勉強している中、彼を独り占めしているかのような錯覚も起こり、独占欲も満たされていくのを感じていた。

「えっと、月夜？顔真っ赤だけど、大丈夫？」

「あ、う……ちよつと、ちよつとだけまって、まって、ください」「う、うん？」

気付けば頬どころか全身が風邪と関係ない熱の高まり方をしていった。

胸が高鳴り、全身に甘い毒が回ったかの様に身体が熱くなっていた。

取り合えず掛け布団を被ることで一時的に情報をシャットアウトし、頑張って落ち着こうとする。

しかし籠ったところで現状が変わることはない。そもそも彼女は視界ではなく音で把握するため、掛け布団をした程度ではシャットアウトなど不可能だ。

「……………えっと、あ、ありが、とう、ござい……………ます」

「……………あ、う、うん」

高まった熱を冷ますのを諦め、布団から顔を少しのぞかせ礼を伝える。

もう怒ることなんて不可能だった。どう言葉を選んだところで、彼が月夜のことを想って行動してくれた事実に変わりはない。

無理に叱ろうとしても、自分の感情を抑えきれずそんな雰囲気はすぐ霧散するであろうことは、簡単に想像できた。

「お嬢ー、ともかく粥作ってもらったんで起きやがってくださいな」

「はい……………え、作ってくれたんです、か？」

「エヴァさんに教わりながらだけど……………あ、味見はしたからそこは大丈夫」

「マコくんの、手作り……………マコくんが、私に……………」

身体を起こし、思わずお粥に意識を集中してしまう。

早く食べたいと思う反面、なんだか胸がいつぱいで食べれるか不安にもなる。

だが食べないという選択肢は無い。直ぐにでも食べようと思った、直前……一つ気付いた。

(……………そういえば、今私汗だくでツ)

流石に寝るときは巫女服ではない。パジャマ姿、正確には薄い浴衣である。

発熱していた中悶々とした後、起きたらドキドキイベントが巻き起こって、彼女の白い肌に汗でピツタリと服が張り付いていた。

身体のラインがはつきり分かるとかいう視覚情報は月夜には分からないが、それ以上に汗で濡れた服や長い髪が頬に張り付き、匂いやらなんやらを気になりだした。

サツと改めて布団を被ると、小さく一言。

「あの、その、身体をつ拭きたいので……少し時間をください」

「え、あ、そ、そーだネ！ごめん、エヴァさんよろしくおねがいますでござえます!!」

エヴァのような口調を半ば錯乱しながら発すると、彼はお粥を持っただまま扉の外に出て、部屋の前で呼ばれるまで待つことにした。

「……………お嬢、何なら拭いてもらってもよかったですんじやないですかい?」

「ふえあ!? な、何を言い出すんですかあなたは!!」

「ククツ、いやあまあそうっすね、ちよいと早いですかね」

「ちよつとも何も、全くもうっ。いいから、着替えとお湯とタオルを早く持ってきてください!」

「はいはい」

……………エヴァの提案をちよつといいかも、と思った月夜だったが今は羞恥心の方に負けて出来そうになかった。

着替えを済ませた月夜は、改めて慎を部屋に呼び入れた。

月夜は身体を拭いている間に少し落ち着いたのだが、慎はそうでもないようだった。

部屋に入っても中々月夜の座るベッドに近寄らず、ぎこちない様子で佇んでいる。

「マコくん?」

「うえ!? な、なにかな!?」

「えっと……ご飯を、頂いていいですか?」

「あ、はいご飯ね、大丈夫まだ暖かいよ味見もしたから問題ないしノープロブレムだネー!」

「??」

お粥を持った慎がおかしなことになっているが、月夜は全く分かっていない。

しかし、しかしだ。扉一つ隔たった場所で気になっている女の子が着替えて身体を拭っており、その際僅かな布のこすれる音とかタオルを絞る音等を聞いて……呼ばれて部屋に入ってみたら少し髪を整える程度ではあるが、小奇麗になった彼女が嬉しそうにこちらを待っているのだ。

慎は、非常に頑張ったと自画自賛した。側に控えているエヴァのおかげもあるだろう、そちらにも最大の感謝を送った。

もしお湯とタオルと着替えを慎が用意して月夜に手渡し、終わるまで外で待っていたら……——慎は考えることを止めた。

「んじゃ、私ちよつとやることあるんで、お嬢に食べさせといてくださいえ」

「あ、はい……はい?」

「部屋から出やがったら罰しますんで、くれぐれも勝手に廊下に出ないでくださいえよ?」

「え、いや、ちよつ」

慎の戸惑いを無視し、エヴァは部屋を出ていった。

ぼうつとそれを見送り月夜と顔を見合わせる。

「えっと、食べ……るよね」

「は、はい」

「……………」

「……………」

暫く沈黙が続き、取り合えず粥を部屋にある椅子を持ってきてその上に置いた。

目が見えない月夜が粥を食べるのは、そんなに難しいことではない。

彼女は耳の良さを利用して空間を把握できるため、小鍋がどこにあるか中身があるかどうか程度は把握できる。

ベッドに座る程度には体力と余裕が戻った月夜に慎がスプーンを手渡せばいいのだが、先ほどのエヴァの言葉が二人の脳裏に遺つて動けずにいた。

——食べさせといてくださいえ。

両者揃つて固まつてしまつたのは、それをしたいが言い出せないことにあつた。

慎は彼女が普通に食べれることを知っているし、月夜は自分で食べるつもりでいたので急なことに思考が追い付いていなかった。

しかし、思考が追い付くと彼女の決断は早かつた。

だって、彼が自分のために造つてくれたものを、彼に食べさせてもらう……こんな甘い誘惑に負け、彼女は自分の羞恥心と理性を乗り越えることに決めた。

「ま、マコくん……あ、あ、あーっ」

しかし、中々言い出せない。あとちよつと、もうちよつとと自分を鼓舞するも言葉が続かない。

今まで色々彼に甘えてきたつもりだが、如何せん昨日のお出かけの余韻が残っているらしい。いつも以上に彼を意識してしまい、妙に強い羞恥心が働いて月夜を止めていた。

「……っ……月夜、はい。あーん」

「!!」

そんな月夜を見て、慎も決断した。

元々彼女の看病をするつもりで来たのだし、と若干誤魔化しも交えつつまだ暖かい粥を掬つて月夜の口元へと持つていった。

月夜は小さな口でそれを含むと、頬を綻ばせた。

高鳴りが止む気配のない胸の鼓動と湧き上がる喜びの感情でどうにかかなりそうだと感じながら、もうどうにでもなつていいと至福の時間を過ごした。

「……………あ、もう完食、だね」

「そう、ですか……………ごちそうさま、でした。おいしかったです」

「あ、あはは、ありがとう。晩御飯も僕が作ってえつと、いい、かな？」

「は、はい。できれば、また食べさせて、ください」

「うん、わかった」

羞恥心が入り混じった笑顔を浮かべ合い、沈黙した。

しかし、嫌な沈黙ではない。二人とも暫く同じ空気を味わうと、どちらかがゆっくり手を近づけ合い、気づけば互いに手を繋いでいた。

「熱いね、大丈夫？」

「そう、ですね……………ちよつとぼうつとします」

「寝た方がいいよ」

「そうします。あ、手、繋いでもらったままで、いいですか？」

「ん、ずっと繋いでる」

「ありがとう、ごさいます……………」

発熱している小さくて柔らかい月夜の手を、彼女より大きな両手が優しく包み込んだ。

二人ともドキドキと胸が鳴り続けていたが、眠りを妨げるようなことはなかった。

気付くと静かに寝息を立てている月夜を慎は眺めていた。

その後、エヴァが狙ったように月夜が起きた頃に戻ってくるまで、静かで少し落ち着いた時間が流れていった。

そして約束した通り晩のご飯、煮込み風うどんも慎が作り月夜と一緒に食べ、そのまままた手を握って彼女が寝付くまで部屋を出なかった。

次の日、自然と手を繋いで登校する二人の姿はあつという間に全校生徒に広まった。

彼女たちはあれで付き合っていないことに驚きながら、触らぬ神に祟りなしと全員が見守ることに徹したという。